
東方聖杯戦争

gray-zone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方聖杯戦争

【Nコード】

N3288Y

【作者名】

gray-zone

【あらすじ】

こちらは東方projectのキャラや世界観並びに型月作品のキャラと世界観を混ぜ合わせた、いわゆるクロスオーバー作品となっております。二次創作やオリジナル設定などが苦手な方は回れ右をお勧めします。

9月28日

？

ほら呼んでいるよ。誰を？ ほら詠んでいるよ。何を？

ほらちゃんと聴こえてくるさ。幻想が幻想として散ったのにそれらをまた掻き集めようと必死な声が。

夢は終わったのにまた夢を始めようとしてるんだ。

哀れだとは思わないし凄いともし思わない。ただ成るようになるだけ。

その結果がどのような結末であろうとも。

そう、夢から覚める前に夢を壊された。

それを不条理とするのか運命とするのか。

でもどのみち納得はしなかった。

だから抗って抗って抗った。

さあ、夢の続きを見ましようか。

悠木^{ユウキ}

風花^{フウカ}

風花は焼きたての食パン一斤を口に挟みながら自転車に乗

って通学路を走り抜けている。現在時刻は午前8時25分。高校2年の彼女にとってみれば遅刻ギリギリという先の未来が半ば見えている状態だがペダルを漕ぐ足は緩めない。

そして校門をくぐり自転車置き場にドリフトを決めて駐車すると、そこからは校舎へと全速力で自身の脚を使って駆け抜ける。口に啜えていた食パンはここで食べきる。始業が始まるチャイムが鳴ると

同時に風花は教室のドアを開けて一步を踏み入れる。

「セーフ！ セーフセーフ！」

「……よし、アウトだ。悠木は遅刻つと」

担任の教師が出席簿に書きこんだのを見ると愕然とした風花。

「よし、一限目は俺の授業だからこのまま始めるぞ。起立ー」

朝から全力疾走の甲斐も無く、進路に関わってくる点数を減らされた。

陽は以前よりは優しくしかし寂しい。そろそろ衣替えの季節を控えた9月27日の秋空だった。

今日の授業が全て終わり、更には終礼が終わって10分程度が経過した放課後。悠木は教室でクラスメイトと一緒に談笑して過している。グラウンドからは早くも運動部の掛け声がここまで聴こえ始めている。

風花は一緒に話しているグループの一人に話しかける。

「あ、そだ香菜子。今日神社の手伝いして欲しいって言ってたよね？」

「そうなの。蔵の中を整理しないと大変だからさ……人出が欲しくて」

「現役 of 巫女さんは大変だねー。コスプレをしても馬鹿に出来な

「いぐらい綺麗なんだからさ」

「貶してるのか褒めてくれてるのかどっちなの？ あと巫女装束はコスプレじゃありません」

風花が話しかけた女子生徒の名前は酒井^{サカイ} 香菜子^{カナコ}。酒井は悠木とは同じクラスで仲が良く自宅は神社で、親が神主をしておりその娘の彼女は手伝いとして巫女をしている。

「そろそろ行った方がいいかな……お父さんも大変だろうし」

「そっか。じゃ行こう」

他のクラスメートに別れを告げて二人は教室を後にした。

この彼女たちがいる賦氣市^{フキ}は二十年程前から急激に開発が始まった地域である。その以前はほとんど山だったらしく何故急激に開発が始まったのかは疑問だが、都市化と未だにそれが行きとどいていない自然があふれる場所とが共存しているのがこの賦氣市である。香菜子の家でもある神社は賦氣市にある山の頂上にある。それも小高い丘程度ではなくそれなりに本格的な山なのだ。ある程度の舗装は済んでいるものの未だにいきとどいていない場所も多く少し道を逸れれば森林という賦氣市の特徴をここだけで語れるような場所である。

「あのさー」

「ん、何？」

気だるそうに悠木は急激な坂道を自転車から降りて登っている。その横を酒井も同じように自転車を押している。流石にこの坂道を女子に自転車を漕いで登れと言っても無理難題というほどには急勾配である。

「なんで香菜子とこの神社は山のとっぺんに建てたのさ……しんどいよ」

「ううん。お父さんに聞いてもよく分からないって言うしなあ。お爺ちゃんはより神様に近づけるように山の頂上に神社を建てたんだって言うてたけど。なんでも、昔には本物の神様がいたみたい」

「へー。まあ昔は昔でも今は今だしさあ、何というか、分社を作ってそっちをメインにすれば山の頂上まで行く必要のないのにね」

「分社をメインにすればそれはもう分社じゃないから、ね？」

そう言つて悠木は大声で笑った。一瞬きょとんとした酒井だったが少し遅れてつられて笑つてしまう。悠木の冗談に真面目に諭す酒井。それがいつもの光景であり今が日常だった。

そして目的地へ辿り着く。

賦氣市を半ば一望できるそこは特等席と呼べる場所だった。少し遠くには紅色を基調とした派手な洋館や湖があり豊かな森などが見える。都市化が進んでいる部分とそうでない自然が残っているというその微妙なバランスは見る人を素直に感動させる。

「いつ見ても綺麗だねーここは」

「そうだね。じゃ私の家もすぐそこだし行こっか」

もう坂道はなく緩やかな坂が平坦な道のりだけ。二人は自転車に乗って酒井の自宅を目指す。

二人は自転車を降りて鳥居をくぐると境内の裏手にある居住スペースに回り、風花は6畳ほどの和室に通された。

「じゃ、ここで着替えてね。私も着替えてくるから」

「オッケー」

悠木は鞆から学校指定の体操服を取り出すとそれに着替え始める。酒井は巫女装束だろうが自分は外部の人間なので適当にしているとのこと。着替え終わると外に出て境内で酒井を待つ。特にやることもなく、時間が余っているので脳内で今日の授業の復習を適当に行う。

——えつと、二倍角の公式は $\sin 2\alpha = 2 \sin \alpha \cos \alpha$
……後は、何だっけ？

疑問が生じたので必死に思いだそうとするが思いだせない。もやもやして無性に体が動かしなくなってきたので適当に準備運動していると香菜子が来た。

「ごめん、待たせたね」

ぱたぱたと走りづらそうに来了酒井は思った通り巫女装束だった。何故か腋が露出するような珍しい巫女服だがこれも何かの事情があるのだろう。

「じゃ、蔵の方に行こつか。日が暮れるまでには終わらせたいし」

「そだねー。あまり遅くなると親が心配するし」

二人が神社の外れにある蔵まで行くと当初の目的である掃除に取り掛かり始めた。蔵の中には既に人がいた。

「ああ、風花ちゃんよく来てくれたね。うちは本当に人出が足りなくて……ありがとう。本当に助かるよ」

そう礼を述べたのは香菜子の父でありこの神社の現神主である酒井稔^{カイ ミノル}。彼は風花に向けて一礼すると娘に声をかける。

「おかえり香菜子。いつも手伝わせて悪いね」

「ううん大丈夫だよお父さん。私も好きで手伝ってるんだし。……よいしょと」

香菜子はそう言うつと蔵の中に入っていき近くにある荷物を持ち上げる。風花は少し蔵の内部を見渡してから香菜子の後に続いて手短な荷物を持った。正直な感想はそれなりに整頓はされているのであまり時間はかからなさそう、と言ったところか。しかしそんな思考はさておき、ところでここからどうすればいいのか分からないと気づく。

「あ、それも一旦蔵の外に出すの」

「了解ー」

それに気づいたのか、香菜子は素早く風花に指示を出すと今持っている荷物を外に出すために蔵から出ていった。やはりその後には風花も続く

その時、地面が揺れる。グラリと今自分が地につけて立っているという感覚すら危うくなる中で何とか堪えようとするがその甲斐も空しく転倒してしまう。

ものの十秒もすると地震も治まり、いつもの感覚が戻ってきた。

「痛ったー……腰打ったよ……」

「風花、大丈夫!？」

「うん、軽く打っただけだから」

どうやら香菜子も蔵の外で転倒したのか、巫女服がところどころ砂で汚れてしまっているが目立った怪我は無いようだ。

「おーい、香菜子、風花ちゃん。ちょっと手伝ってくれないか？」

二人が声をした方を振り向けば、蔵の棚に積まれていた荷物が地震によって崩れて雪崩^{なだ}れて来たのを総が全一人で支え切っていた。つまり今の彼は全くの身動きが取れないということ。

「お父さん!？」

香菜子は急いで駆け寄って慎重かつ迅速に父親が支えている荷物

を取り除いていく。風花もそれを手伝う。ものの数分で解放された稔はゆっくりと息を吐く。

「ふう……また地震か」

稔は辟易としたようにぼつりとそう呟く。

「最近、急に地震が多くなりましたよね……確か一昨日も地震があったし」

「大体一ヶ月ぐらい前からだよね地震が多くなったの。大した被害も出ていないからあんまり心配する必要はないみたいだけど」

風花の言葉に補足をする香菜子はそう言ったものの、表情には僅かに不安が含まれているようだ。

「まあ今は気にしても仕方がない。とりあえずこの荷物を片づけて今やるべきことをやろう」

稔のその言葉で二人も蔵の掃除へと切り替えててきぱきと行動し始めた。

そして掃除が終わり、蔵から出た時には陽は既にほとんど落ちており神社の境内は藍色から宵闇の黒へと移行行くところだった。

「時間がかかってしまったね。ごめんね風花ちゃん」

「うう……ごめんね」

「大丈夫大丈夫！ 友達が困ってたら助けるのが当たり前だよ！」
父娘から謝罪されるがまだそこまで遅い時間でも無い。この程度なら大丈夫だろう。

「本当にありがとうね。それじゃ私は先に奥の方に戻っているよ」

「あ、ありがとうございました」

「いやいや風花ちゃん、お礼を言うのは私たちなんだから君は普通にしてくれればいいんだよ。じゃあね。今日は本当にありがとう」

そして香菜子の父、稔は神社の裏手にある居住スペースの方へと消えていった。

「あ、ちょっと待っててね」

「うん、分かった」

香菜子の言うとおり風花は蔵の手前で待つことにする。また歩きづらそうにはたばたと小走りで神社の裏手へと消えていく。しばらくすると戻ってきた。

「はい、風花の荷物とお礼」

「え、荷物ぐらい自分で持ってくるのに！」

「大丈夫だから。あとこれも忘れないでね」

そう言っつて酒井はお守りを差し出す。それは夜の月明かりに反射してきらきらと優しく緑色に光っている。それはとても幻想的で受け取った悠木はしばし見惚れる。

「本当に光ってるみたい…… 凄い綺麗」

「うん、ご利益があるはずだよ。さつき蔵から出てきたんだけどお父さん曰く凄いものなんだって」

「これなら信じちゃうよ」

そう言っつて風花は笑って香菜子に手を振ると神社を後にする。帰りは下り坂だけしかないため自転車に乗ればジェットコースター気分を味わえるはずだ。

鳥居をくぐると酒井から貰ったお守りを月明かりに照らしてまじまじと観察する。綺麗だ。幻想的でいつの間にか目が奪われている。

「ほんとに神様とか出てきたりして……」

冗談のつもりだった。この神社には神様がいたと香菜子が言っていたからただ何気なく言っただけだった。なのに。

『我を呼ぶのはどこの人ぞ』

後ろから聞こえて来たのはまったく聞き覚えのない声が、聴覚がそれを捉えた瞬間に脳が跪けと全身に命令を下すような声が聞こえてきた。振り向けない。振り向いた瞬間に、決定的な何かが崩れると本能が叫んでいる。

——怖い——怖い——怖い！

心臓は瞬く間に早鐘を打ち始め、皮膚は恐怖を流れ落とそうと汗を流し、呼吸は何事も寄せつけぬ様に息を吸い込むことは無くずつと吐きだしているような錯覚が——。

「風花？」

名前を呼ばれたと気づいたのはそれから何秒経過してからだったのだろっ。後ろを振り返れば友人がこちらに向かってきていた。

「え……あ……大丈夫、だから」

「顔真っ青だよ？ 本当に大丈夫？ 鳥居の下でいきなり止まるから心配したんだけど」

「うん、大丈夫だからさ。ちょっと目眩がしただけだから」

酒井にあの声は聞こえなかったのだろうか。聞こえなかったのならそれに勝る安全はないのだが。

友人の方を振り返り改めて別れを告げようとして——夜空には満月があった。しかしいつもとは違う。まるで神社の裏手に月があると錯覚してしまうほどに月が大きく見えて、そして神社の本殿の屋根の上に人影があった。逆光で容貌は分からないが、その人影

の周囲に無数の円柱が浮いていた。

信じられない、と目を見張ったがいつの間にか人影は消えて月もいつも見知っている遙か天空に煌煌と光っている。

「……？」

悠木を心配そうに見つめる酒井だが、それに気づいた悠木は努めて笑顔で別れの挨拶をして帰路についた。

月下。賦氣市にある山の頂上にある神社の境内。そこに巫女装束の少女だけがいる。

「全く……一般人の前では姿を現さないようにといったはずですよ、神奈子様」

「……いやあ、ちょっとからかってみたくなっただけ、なんだけどねえ」

少女一人しかいなかった神社境内に人影が生まれる。その人影は普通の人影と比べるのなら異質、としか言いようが無かった。背中には締め縄を背負っており服装は現代人のそれとは大きく異なっている。さらなる特異は“宙に胡座で座っている”ということ。

「まあまあ、外の世界なんて久しぶりなんだ。少しハメを外させてもらっても罰は当たらないよ」

「神奈子様って……神様なんですよね？」

「ああ、私は八坂 神奈子。昔、とある山で祀られていた農業の神様さ。今は聖杯戦争なんていうお遊びに召喚されたアーチャーだけどね」

「それで、神奈子様の言うとおりに蔵の掃除をしましたが目的の物は見つかりましたか？」

「それが駄目だったんだよねえ……唯一ロクなものがあつたと思つたらあんたがお友達にあげちゃったし」

「そうなんですか……つて、えええ！？」

「まあ、いいじゃないか。元々期待してた事じゃなかったしね」

そう言つて豪快に笑う神奈子は月を見上げる。

「しかし、この聖杯戦争つても面白いね。死んだはずなのにこうしてまたこっち側に来た。それに勝ち残れば願い事を何でも叶えてくれるなんていうオマケ付き。食いつかないはずがないじゃないか」

神奈子はある種の直感で感じ取ると自分の手足と同等の“それ”を香菜子の周囲に張り巡らせる。それとは神奈子の力そのものと言つていいもの——御柱が轟音とともに地を穿ち直立し香菜子の周囲に張り巡らされた。

その直後に光線が御柱に直撃する。

「っ……!？」

驚きのあまり声すら出ない香菜子は現在の状況にすら理解は追いついていない。

「そこか」

神奈子の声は、既にここを立ち去っている風花に話しかけた時と同様のそれだった。その後放たれる3本の御柱は高速を以て空気を裂き、風を巻き起こしながら突き進む。

しかし御柱の進路上に出現したのは先ほどと同じ一条の光線。それは夜空に瞬く流れ星のように神奈子の御柱と衝突し御柱の軌道が微かに右へと逸れるが姿の分からぬ襲撃者にとってはそれで充分なようだ。

「今の私と同じ……サーヴァント、ってやつかい」

背後に新たな御柱を召喚させる。

そして地上にいる香菜子は上空で行われた攻防の末に、夜空の中に、襲撃者と思しき影を捉えた。それは前を閉じたマントを羽織り、さらにはフードまで深く被って姿を隠しており、外の暗さも相まって輪郭程度しか視認できない。しかしその輪郭すら朧気に見えている程度である。

その正体不明の襲撃者は無言のままマントの隙間から腕を出し、弓を構える。

「アーチャーに弓を向けるとは良い度胸じゃないか……どこぞのサーヴァント」

弓から射出されるのはやはり光線。しかし今度は二条だ。神奈子は御柱を垂直に立てて盾として使用するが真正面から受けていてはやり過ぎせない。角度をつけて弾くのが得策と判断し、マスターである香菜子には中らないように角度を調整。そして攻撃を受け流しすぐさま反撃に転じようとしたところで、敵影の姿はおるか気配すら無くなっていた。

「逃がしたか……」

舌打ちをしたところで地面が妙な音を立てている。ミシミシとまるで崩落寸前のような音を。

神奈子が動いたのと正体不明のサーヴァントの攻撃を受けた山の頂上の一端の崩落が始まったのはほぼ同時だった。

——ああ、あいつの攻撃に足場が保たなかったのかい……厄介だねえ。

「きやあつ！」

幸いな事に月を遮るものはなく視界は良好そのもの。マスターの危機にサーヴァントは余裕をもって対応できる。

今まで立っていた地面がいきなり崩れる感覚と言うのは不思議なものだったと香菜子は思う。ふっ、と体が浮いたかと思うと地面ごと山の斜面を滑り始めていた。恐怖はなかった。そもそも恐怖を感じるべき状況に遭遇しているという事態にすら理解が追いついていなかった。そして不意に止まる浮遊感。誰かに抱きかかえられているようだ。

「大丈夫かい、マスター？」

「え……あ、ああ……はい」

どうやら神奈子に助けられたようだ。俗に言うお姫様抱っこの形だ。それにしても宙に浮いているという事にすら驚く。このままでは驚き疲れて寿命が縮まりそうなほどに。

一度だけ深呼吸すると何かに思い至ったように、神奈子に大声で呼びかける。

「か、神奈子様……！」

「何だい何だい……こんな間近で大声で呼びかけられると耳が痛いよ」

「呑気にしてる場合じゃないんです！ この地崩れが起きた方向は賦氣市の市街地なんです！」

「……本当の目的はこっちって訳かい」

悠木 風花は坂道を自転車に乗って疾走していた。ビュウビュウと風を切っている音が耳元で暴れまわっている。ハンドルを切って大きく緩やかなカーブを曲がりきる。

すると夜空がいきなり光り輝いた。昼までとはいかないが夕刻の時のような数時間前の明るさが夜の賦氣市に戻ってくる。

「花火……かな？ お祭りなんて無かったはずだけどな」

風花はブレーキを掛けて停止すると夜空を見上げる。そこには流れ星のような光の筋が幾つも瞬いていて、つい我を忘れてしまった。不意に今までよりも視界が明るくなったかと思うと、その内の一つが何かに弾かれたように急に方向を変えて風花の間近の斜面に来て炸裂した。その余波として爆風と木々の破片が辺りに散乱する。

そのまま風花も爆風に煽られ、自転車から転げ落ちて背後のガードレールに背中を打ちつける。

「いつ……！？」

——背骨折れた？ 体の中が滅茶苦茶になってる絶対なってる。

呼吸が一拍停止するほどの衝撃は一般の女子高生を混乱させるには充分すぎた。全身から発せられる痛みが冷静を奪っていく。ガードレールが無ければこの山から落下していたなどという仮定の話にはもちろん追いつかない。

「う……あ……」

四つん這いになって呼吸を落ち着けるとゆっくりと立ち上がる。そしてその時になって初めて聴覚と視覚が前方から地崩れが起こっているという情報を伝えてきた。

体の中がぐちゃぐちゃで呼吸すると辛い。そのせいか、体の中に“何か”があるような感覚があって酷く気持ち悪い。

——あれ、なんだっけ。確か風花の家の手伝いした帰りだったよーな。それで花火が近くに落ちて風に煽られてガードレールにぶつかって……で、今日の前に土砂崩れが来てて。

土が迫ってる。

——私死ぬのかな。嫌だな……私まだ何もしてない。仕事もしてないし結婚もしてないし友達ともっと喋ったりしたいし。もうすぐ文化祭とか体育祭とかもある。夢だって叶えてない。

いつか台風が来た時に見た河が氾濫した時のような激流。それが今日の前に。目の前に。

——せっかく将来やりたいことを見つけたのにここでお終いなんてあんまりだよ神様。

あとどれくらいの時間があるんだろう。まるで世界全ての時間が遅延しているような。

——死にたくないんじゃない。生きてやらなきゃならない事があるのに死ぬなんておかしい。

こんなにも時間があるなら。五。走ってここから逃げればよかった

たと今更ながらに。四。後悔していると視界が影に覆われる。

「召喚早々、命の危険な状況とはどういうことですか」

少し首を持ち上げて確認すれば。三。いつの間にか目の前に見知らぬ少女がいた。二。少女の綺麗な白髪が月に映えてる。一。そして少女が背中の鞘から長刀を抜く。零。

少女が抜いた刀に鮮やかな青色の靄が帯びる。それは雲ひとつない天空と見紛うほどに澄んだ色。それが刀状に一気に膨張して青い靄を含めた刀身が三メートル。否。その倍以上に伸びる。そして大上段に振りかぶり。

「迷津——」

渾身の力で振り下ろす。

「——慈航斬！」

青い閃光。瞼さえ透過するような烈しい光は全てを飲み込まんとしていた土砂を鮮やかな縦一閃の下でこの場からかき消した。

「え……あ、あれ？ 土砂崩れは？」

「斬り伏せました」

チン、と長刀が鞘に収まる音。

「成り行き上、助けてしまった形になりましたが今一度問います」

そう言って少女は風花の方へ振り返る。澱みのない綺麗な白髪。月明かりですら透き通りそうな白い肌。見るものを射殺するような視線。背負っている長刀と腰に差している短刀。傍に浮遊している謎の物体。

「あなたが私のマスターですか？」

問いかけられた質問はしかし、風花ですら量りかねるものだった。

「マ、マスター？」

「えっ！？ 私、何か間違っていましたか！？」

少女は大声で疑問を投げかけた風花に確認を行う。少女の眼は刺すようなものから温和なものへと変わっていると風花は気づかない。少女はしばらく一人黙考すると再び口を開く。

「間違っていないはずですが……私は確かにこの聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されました」

「さ、サーヴァント？」

「え、えええっ！？」

お互いの話が全く噛み合わないまま二人とも頭を抱える。そこに来訪者が一人。

「風花！」

「香菜子！」

香菜子がぱたと神社のある方から小走りで駆けよってくる。風花の胸に言葉にできない安心感が広がってゆく。途端に擦り剥いている膝や強打した背中が痛み始めたが構わずに友人の元へ歩み寄ろうとすると、抜き身の長刀が進路上に立ちふさがった。

「あなたが私のマスターではないのなら全く関係はないのですが、もしあなたが私のマスターであるならばあれはあなたの敵ではないのですか？」

少女は風花の方を振り返らずただ長刀を以て風花を制している。その双眸がまた刃のように鋭くなっている。

「敵……？　香菜子は私の友達で……」

「現状、この場では私のマスターと思しき人はあなたしかいません。よってあなたをマスターと仮定して現状の解決を行います。あなたを危険に晒すわけにはいきません」

「風花。その人は誰なの？」

背中に寒気が走る。それはいつ聞いただろうか。恐らく十数分前の“アレ”と似たようなものが友人から発せられるのはどういう事なのだろうか。

分からないが誤解されているのかもしれない。説明をしなければ。

「わ、私にも分からない……でも土砂崩れから助けてくれて……」

「私はセイバーのサーヴァントです。あなたなら分かるでしょう？」

そう言って風花の発言を遮った白髪の少女は長刀の切っ先をスツと香菜子へと向ける。

「っと、私のマスターに何をやらかすつもりだい？」

何の前兆も、一片の音すら無く少女が香菜子へと長刀の先端に人が現れた。背中に締め縄を背負って少女と同じように現代のものではないような服装を着ている女性だ。

少女は驚くこともなくただ自身の武器の上に立つ女性を見た。

「これはまた懐かしい顔を見たものです」

「それはこっちのセリフだね。まさかアーチャーになってまた来てまであんたを見るなんて」

そしてまるで示し合わせたように両者は大きく後ろへと飛び退く。両者はそれぞれの主の元へと戻る。少女は長刀を両手で構えたまま

眼前の二人をその刃そのものとも言える視線で見ている。神奈子は自身のマスターの傍へと着地すると二、三の言葉を交わす。

「いいかい香菜子。確かにあいつはセイバーだけど、まだあんたの友達がマスターだとは決まり切っていないはずだ。あの子がマスターである証拠を確認しな。もしそれが無かったのならあんたの心配は全部無くなるはずだ」

「神奈子様……。そうですね。風花！ そのままでいいから私の話を聞いて！」

風花は頷いて肯定を示すと、香菜子は安心したように一度深呼吸をする。

「風花の両手のどこかに赤い痣ってある？」

——痣？ 今さっき派手に転んだところだから痣や傷なんてどこにでも……。

肘や二の腕をくまなく見てみるが香菜子が言っているような赤い痣はどこにも——あつた。左掌。そこに明らかに負傷でできたとは思えない何かを象った赤い痣がある。心なしかまるで脈動するように明滅しているように見えるのは気のせいなのだろうか。

「あつたよー！ ほらー！」

友人にもよく分かるように左手を高々と上げて見せる。それを見た香菜子が固まった。離れている風花でも分かる。動きが。四肢が。

表情が。心が。それら全てが停止しているような。

「ねえ、どうしたの？ 香菜子ってばー！」

「あ……うあ……どうしよう……」

「一旦退くよ、香菜子」

神奈子は香菜子を抱きかかえるとこの場から消えた。

刀を持った少女がすぐさま上を見たので風花もつられて見るとそこには確かに友人を抱きかかえた神奈子が空を駆けていた。

「え……何で？」

香菜子に言われた通りに赤い痣をあることをちゃんと教えたのに。

「その赤い痣は令呪と呼ばれるものです」

白髪の少女が長刀を鞘へ収めるとこちらへ振り向いてそう言ってきた。

「私たちサーヴァントに対する絶対命令権であり、聖杯戦争に参加したマスターの証です」

「令呪？ サーヴァント？ マスター？ 聖杯戦争？」

「……まさか何も知らない、のですか？」

「当たり前でしょ！？ いきなり土砂崩れに巻き込まれそうになったと思えば何も知らない人に勝手に話を進められて友達も……」

「そういう事ですか。道理で話が噛み合わないはずです。追って事情を説明しますから落ち着いて話をできる場所まで案内してもらっていいでしょうか？」

得体の知れない不安を抱えながら、風花は頷くと一つだけ言う。

「私は悠木 風花。あなたは？」

「私は……妖夢。セイバーのサーヴァント、魂魄妖夢です」

風花の自宅。平屋の和を基調とした日本建築には彼女と祖母しか住んでいない。両親は幼いころに死別してしまった。人二人が住むには少し広すぎる敷地内は夜の静けさも相まって不思議な感覚だ。先ほどの擦り傷などのせいで体中がズキズキと痛むが我慢できるレベルだ。

現在の時刻は午後9時。祖母との夕食も終わって自室にいる。明日も学校だが今日は風呂には入らない事にした。その代わり最低限の汚れを落とすためにお湯にひたしたタオルで傷を刺激しないようにそつと拭いた。髪は明日の朝洗おうと決めた。祖母にも怪我のことは訊かれたが自転車に乗ってたら転んだと説明しておいた。

今はほぼ全身に包帯やらガーゼやらがテーピングで固定されてい

る。むしろ病院に行った方が良かったかもしれない。
そして一般の女子高生だった女子の部屋に、その部屋の主と一人の少女がいる。

「じゃあ妖夢、でいいんだよね。説明してくれないかな」

「はい、分かりました」

妖夢と名乗っている白髪の少女は床に綺麗に正座をしてベッドに腰かけている風花を真っ直ぐと見ている。

「まずは聖杯戦争というものについて説明します」

「うん、分かった」

「この世には遥か昔に聖杯と言うものがありました。風花も神話や物語などで耳にしたことがあるかもしれません。聖杯というものはあらゆる願いを叶えます。しかし聖杯の所有権は一人のみ。だから聖杯戦争という形で聖杯の所有権を巡って争うんです。それに数多の人が参加したらいつまで経っても終わらない。

だから聖杯は自らの意思で相応しい人物を七人選び出し、その七人で聖杯戦争を行います。戦争と言うからにはやっぱり殺し合いになるんですけど、選ばれた自分たちが殺し合うとあとくさりが出てくるので、使い魔……噛み砕いて言えば人形みたいなものと思って頂ければ。その使い魔を同士で戦わせ、使い魔の勝敗イコール使い魔の主人とした方があとくさりがないでしょう」

「うん……殺し合いは、うん」

気まずそうに顔をしかめたり俯いたりと落ち着きの無い風花を見

た妖夢はそれでも話を続ける。

「その使い魔を使役するのがマスターで、使い魔が私たちサーヴァントです」

「よ、妖夢は人形じゃないでしょ！」

「――」

ふと、妖夢の口元に笑みが零れる。まだ召喚されてたった数時間しか経っていないが自分のマスターは優しい人だと分かったから。少し声が上ずりそうなのを必死に堪えながら。

「ありがとうございます。しかしよく考えて下さい。風花が聖杯戦争という自分の願いの為に繰り広げる殺し合いに巻き込まれたという事です」

一般の女子高生の自室に沈黙が訪れる。しばらくすると耐えかねたように風花が口を開いた。

「で、でも妖夢が戦って、私は戦わなくていいんでしょう？」

「もう少し説明をさせて下さい」

「？」

「基本、原則として聖杯戦争のマスターに選ばれるのは魔術師と呼ばれる者たちです。まあ……漫画などに出てくる魔術を使役する

ような者と考えてくれればいいかと」

「どういう………こと?」

「いいですか? 風花に分かるように説明すれば聖杯戦争というのは魔術を使う魔術師が参加するもの……つまり一般人の風花が参加したこと自体がイレギュラーなんです。さらに一番効率の良い戦い方は私たちサーヴァントを無視して直接マスターを倒すことなんです」

くつと風花が息を呑んだのが妖夢には察知できた。けど妖夢からは目を逸らそうとはしない。

「私たちサーヴァントというのは風花のようなマスターを依り代として召喚されています。つまりその依り代となっているマスターさえ倒せば私たちサーヴァントは存在することができないんです」

失言だ、と妖夢は即座に判断した。

「あ、安心してください! 私、魂魄妖夢が命に代えてでも風花を守り通しますから!」

「そっか、ありがと。じゃあこの赤い痣……令呪だっけ? これは何なの?」

「それは私たちサーヴァントに対する絶対命令権です。令呪を使えば私たちにどんな命令でも下すことができます。令呪は私と風花との間だけの契約の証であり繋がり……この範疇ならば不可能はないです。むしろ不可能を可能にするのが令呪。風花が令呪を以て私に

命令するのであれば必ず果たします」

「どうやって使うの？」

「令呪を使う、と念じるだけで大丈夫ですよ。ただし無限ではなく三回限りです」

「そう……」

「それに令呪は無闇に使わない方がいい。もし私が風花の意図に氣にくわなかったり、私があなただけを剣に向けるようなことがあれば必ず令呪を使って下さい。令呪は私たちサーヴァントに対する抑止力でもあるんです」

風花はもう妖夢と眼を合わせようとはしない。

「じゃあ香菜子が私を避けた理由って……」

「ええ、あなたがマスターと発覚し明確な敵と認識したからじゃないでしょうか」

しかし、妖夢は気づく。風花の顔がみるみるうちに暗くなっている。それもそのはずだ。彼女はつい数時間前までは何の変哲もない普通の女子高生だったのだから。だから次の言葉を妖夢は言う。

「何も知らない人がいきなりこの話をされて納得しろ、と言われて納得できるはずがありません。今日は休んだ方が良くと思います」

「うん、そうするよ……」

風花は寝ころんで布団をかぶったが、ふと思いついたように妖夢に背中を向けたまま言った。

「妖夢はどうするの？」

「私は風花を守るためにここにいますよ」

「そう……じゃあ、お休み」

「お休みなさい風花」

——殺し合うのかな……そんな事、あるはずがない。絶対にない。だから大丈夫……。

解消しようの無い気持ちを抱えたまま、風花は眠りへと落ちていく。

懐かしい光景を見た。
着物姿の女の子が笑ってる。

「あなたは私が見えるの……？」

頷くとこちらの私の頭をそっと優しく撫でてくれた。

「ほら早く行きなさい。私は悪いお化けだからあなたを食べちゃうぞ」

そう言つて女の子は私を立ち去るように後ろを向かせた。すぐに振り返つてみると女の子はまるで陽炎だったかのように消えてしまつていた。

翌朝。夏の暑さもまだまだ続く9月28日。

ジリリリリ、と朝の来訪を忙しく告げる目覚まし時計を停止させて悠木 風花は起床する。

と、途端に部屋の中に一つの気配が生まれる。

「おはようございます。風花」

背中に長刀を背負い、腰に短刀を下げた風花より少し年上ぐらいの少女。そしてこの少女の存在で風花は昨日にあつたことを全て思い出す。左手のひらを見るとそこには何かを象つたような赤い痣がある。

「夢じゃ、なかったんだ」

「ええ、聖杯戦争は現実に起こっています」

「今さ、いきなりこう……ヒュウって現れたけど、それも手品つていうか魔法みたいなものなの？」

「私たちサーヴァントというのは元々霊体なんです。まあ幽霊み

たいなものと考えて下さい。それが形をもってこの世に現れている……まあこの姿と幽霊みたいに姿を消せたりできるんです」

「へー、凄いね。街中でも怪しまれることは無さそうだし」

「ええ。元より聖杯戦争とは過去に何度も行われてきました。しかし表に出たことはありません……つまりそれほどに隠匿されていたという事です。それよりこれからどうするんですか？」

ベッドから出た風花は大きく伸びをする。

「どうするって？」

「風花は私のマスターです。ならば私たちは聖杯を勝ち取るために戦いに勝ち続けなければいけない。倒すべき敵を探し、見つけ、倒すのが当然でしょう？」

「つまり敵の……サーヴァントを見つけに行くって事なの？」

「ええ、最悪、聖杯戦争の余波が一般人に及ぶ可能性だって否定できません。あなたの今までの常識が通用するとは考えない方が良いでしょう」

「う……でも私にも進路とか出席日数とかあってさ……」

妖夢は眉を立ててキツと風花を睨みつけ、その視線にまるで体を射抜かれたような錯覚すら覚えた風花は立ちすくむ。しばし流れる沈黙。それを破ったのは風花だった。

「もうこんな時間か。学校行かなくちゃね」

時計を見て小さい空笑いをする風花は壁にかけてあった制服を手に取り、それに着替え始めた。
妖夢は思う。

——つい先日まで一般の女子高生だった彼女にこんな事を言っても信じてもらえないのが普通……それをある程度信頼を得ている、と考えられるだけマシというものですか。

風花の体中にある絆創膏や包帯、テープिंगの数々。そこで妖夢は違和感を感じる。昨日の風花はどんな状態だったのか。自転車から転げ落ちて全身に擦り傷や打撲があったのではないのか。
普通の人間ならば……ならば今はガーゼの隙間などからまだ生々しい赤い傷が見えているのが常識ではないのか。

「風花。一つ質問があります……あなたは本当に普通の一般人なんですよね？」

「そうだよ。だからここまで妖夢に迷惑をかけてるんだけどさ」

「ならば、そのガーゼの下にあるはずの傷はどうしたんですか？」

「え……？」

言われたとおり風花は恐る恐るガーゼを取ってみる。そこには傷などは無くただ綺麗な白い肌があるだけだった。そこで風花すら違和感に気づいた。怪我をしたのは昨日の今日なのに痛みは全くなく、まるで完治したような体調なのは何故なのかと。

風花はまるで体についた虫を取り払うかのように体中のガーゼや包帯を取っていく。

「何で……何で……」

その一切がたった一夜で完治する程度の傷ではなかったはずなのに。

「風花。それは治癒魔術を使う魔術師ですらある程度の熟練者ではないと完治できないスピードと精度です。……私はそちら方面は専門外ですが、本当に風花は魔術師ではないんですね？」

セイバーのマスターは答えない。

越奈田^{こしなた} 紅莉^{あかり}は実家のある賦氣市へと帰省していた。というのも父を追って政治家という身分になってから約2年程度だろうか。父の背中を追いかけて辿りついた先にあつたのはただ大人が利己のためだけに姑息な手段を使うだけの、言うなれば下等生物の巣窟だった。

そしてそこで見て経験したことは紅莉の理想とはかけ離れたものだった。

何故、平等な選挙が行われぬ。何故政治家が国を想う以前に自己を持たなければいけない。何故政治家がたかが金に執着しなければならぬ。そして民を代表する政治家が何故、何故媚を売らなければならぬ。何故へらへらと作り笑いをして身分というものにこれまた執着しなければならぬ。そして何故同じ政治家同士なのにこつも身分があるのか。

結論から言うのなら、彼女は疲れたのだ。心身ともに理想と現実

のギャップに越奈田 紅莉という存在が追いつかなかった。むしろ追いつくことを良しとしなかったのかもしれない。反吐が出そうな現実に屈するぐらいなら理想をかかげて真っ直ぐに在ろうとした。

「ただいま、かな」

この地に戻ってきたのは何年ぶりだろうか。やはり自然のある賦氣市は空気が澄んでいると実感できる。

仕事は有給休暇を丸々一週間取った。この期間でどれだけ自分が自分に戻れるだろうか。せめて出来る限り羽を伸ばそうと思いつながら都心へと続く賦氣市の駅から故郷の地を踏んだ。

「あー、久しぶりーっ！」

少し大人気も無く両手を伸び伸びと天へ向かって伸ばし、電車でゆられ続けた体をほぐす。これから行く場所はもちろん実家。母は元気にしているのだろうか。

実家を目指して賦氣の街を歩く。今は比較的都市化が進んでいる部分を歩いている。後ろ手に引いているキャリーケースがコンクリートの上を進んでまるで文句を言うかのようにガタガタ言っている。片側三車線の大きい道路の歩道を歩く。人の数は平日の朝方だからなのかスーツなどの人が多い。ここの辺の都市化が進んでる一帯は見る度に景色が変わっているかのように飽きが来ないがどこことなく寂しく感じる。ガタガタ言ってるキャリーケースを引っ張りあと30分ぐらいは歩かなければならない。そのためにヒールではなく普通の靴を履いて、スーツではなく私服を着てる。

「ああ……やっぱりバス使えばよかったかも」

今更の後悔があるが仕方がない。一度決めたことをやり直すため

に戻るのは嫌だ。そんな事を考えながら歩いていたらなのか正面から人が来ているとも知らずに歩を進め、そのままぶつかってしまった。

「あつ………すみません！」

「いえ、こちらこそ不注意でしたので。申し訳ありませんわ」

頭を下げた紅莉が頭をあげるとそこには外国人のような容姿をした女性がいた。白色のブラウスに赤地に黒のラインが入ったチエツク柄のベストを着て、同様の柄のスカートを穿いている女性だ。首元に黄色いリボンが結ばれている。そして何より目を引いたのがその緑色の髪。普段は目にしないから驚いてしまった。

そしてあまり日差しは強くないというのに日傘をさしている。

「お怪我はありませんか？」

「ええ、大丈夫です。本当に申し訳ありません」

紅莉は相手の気遣いに答えて再び謝罪する。すると外国人のような女性はにこりと微笑む。笑顔がとても似合う女性だ、と同性の紅莉は思う。こんなにも綺麗な人がいるということにある種の感動を覚える。

まるで太陽のように優しい笑顔に、紅莉も自然と笑みが零れる。

「申し訳ありません………お詫びをできないのが心苦しいですが」

「いえいえ、本当に大丈夫ですから。それでは私は用事があるのでこれで失礼しますね」

「あ、すいません……では」

紅莉は再び頭を下げると相手のさしている日傘の後ろ姿を見送ると再び歩き出した。

「やっと着いた……」

あれからほぼ30分。都市化の進んでいる賦氣市ではなくまだ自然に残っている静かな方面へと紅莉は来ていた。何度見ても変わらない景色は本当に“帰ってきた”という実感が生まれ、少し懐かしみが出てきた景色を目一杯に見る。
そして実家の玄関の前に立って、一度深呼吸をしてからドアを開ける。

「ただいま！」

「あら、おかえりなさい」

家の奥から迎えてくれたのは紅莉の母だった。

「お疲れ様。休みを取って帰ってくるなんて言うから驚いたわよ？」

「うん、今年入ってから有給使ってなかったしここらで少し羽休めでもしておこうかと思ってさ」

「休みはどれくらい？」

「一週間丸々取っちゃった。少しの間厄介になるよ」

「娘のくせになにを言ってるのもう」

母娘二人してひとくさり笑うと娘は玄関から家の中へとあがる。

「今日の夕飯は紅莉の好きな天ぷらにするわね」

「あ、ありがとう。お母さんの天ぷら楽しみだな。荷物置いたら手伝うよ」

そう言つと紅莉は以前使っていた自室へと向かう。とは言つても帰ってくるたびに自分の部屋にはお世話になつてゐる。そして自分の部屋のドアを開けると思い出が蘇る。家具は学生時代の部屋の配置のままだ。さらに母は定期的に掃除をしてくれているのか、埃などはほとんどない。

懐かしい。あんな黒々とした世界が嘘のように感じられるほどにこの賦氣の街はいつも通りだった。

自分の理想を追いかけた果てに疲労した紅莉は束の間の羽休めを改めて実感する。

地面が揺れる。

少し足元がふらつく程度のものだ。箆笥などの家具は倒れることもなく十数秒後にはいつも通りがあった。

「地震か。それほど大きくはないみたいだけど……」

荷物を部屋の隅に置いて、紅莉は母が夕飯の準備をしているであろうリビングへと向かう。そこで見たのは。

「お母さん!？」

床に倒れている母の姿だった。

「だ、大丈夫よ。少し転んだだけだから。……私も年かしらねえ。そこまで揺れなかったのにこけちゃうなんて。それに最近こういう小さい地震が多いのよねえ」

「もう、お母さんったら」

母に手を貸して立たせるとまた自然と笑みが零れる。それは母も同様のようだ。

そして久しぶりに二人で作る夕食は楽しく、心が洗われるような心地がした。

時刻は午後6時を回る頃になった時に、玄関が開いて、帰宅を知らせる声がリビングまで聞こえてくる。

「ただいまー。あれ、姉貴帰って来てんじゃん！」

「おー、大学の授業お疲れ、草太^{そうた}」

「え、お姉ちゃん帰ってきてるの？」

「あ、美智^{みち}も帰って来たんだ。おかえり」

廊下とリビングの敷居からひよこひよこ顔を覗かせる男女は紅莉の弟である草太と美智である。

「ご飯もうすぐできるから待っててね」

「あ、天ぷらじゃん。海老天もらい！」

母の声を無視して草太のつまみ食いが始まり、それを咎める紅莉と美智。そしてほどなくして楽しい夕食が始まった。

夕食が終わるとリビングで家族での団欒が始まる。ただ楽しい時間だけが過ぎていく。

夜も深まり始めた午後9時。外は既に闇に満ちている。

紅莉は縁側に出て夜風にあたっていた。秋風が柔らかく彼女の頬を撫でる。ふと目に入ったのは庭の隅にある蔵だった。

外は暗く家の方が明るいので逆光となつてより一層、蔵の方面が暗く見える。

——そう言えば、小さいころはあの蔵でよく遊んだな……………。

また懐古の気持ちちが胸の内に溢れてくる。ただ自分の心が訴えるままに縁側から庭に出て蔵を目指す。歩いて十歩程度の距離の先にある蔵は、高さ2メートルと少しの小ぶりなものだ。子供の時はこの高さが果てしの無いものに見えて不思議と怖くなった思い出もあるが今は違う。ただ自然と蔵の木製の引き戸に手をかけて左に引く鍵はかかっていなかった。

蔵の中はまるで泥棒に入られた後のように散乱していた。

「地震のせいで荷物が棚から落ちたままで片づけてないの……………ね」

グラリ、と足元が崩れる。

理解が追いつかないまま、しかしなんとか持ち直して四つん這いになって啞然とする。

「え……………」

ただ膝に力が入らずにそのまま前のめりに倒れて四つん這いにな

った、と理解するまでに要した時間は五秒。

そして蔵の中がやけに重苦しい空気に満ち満ちていると理解したのはそれからさらに十秒後。

苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい。

自分が今どういう風に地に立っているのかという事を忘れた。

自分が今どこにいるのかという事を忘れた。

自分が今どういう状況に陥っているのかという事を忘れた。

自分が今までどういう風に呼吸していたかを——忘れた。

自分の中に鉄板がある。そう、鉄板がある。とても頑丈でそつとやちよつとでは絶対に折れないし曲がらないし傷すらつかない。

その鉄板に向けてゆつくりと金槌を振りかぶる。駄目だ。より大きな位置エネルギーをより大きな運動エネルギーへと変換するために。それはいけない。振りかぶる。駄目だ。ピタリと止める。止める。渾身の力をもって。それをやったら。鉄板を砕かんと。戻れない。

ガギン、と鈍い音がすると共に鉄板に罅が入る。砕けてない。砕けていない。その罅が入ると同時に何かが力チリと当てはまった。

「あ……………は、」

肺に溜まりにたまった空気を吐き出す。過呼吸にも似たような激しい呼吸と暴れ狂っている心臓。汗が止まることを知らない。

ザリ、と土を踏みしめる音がした。

「あら、なによこのお粗末な召喚は」

声がしたのは後方。蔵の外から。しかし声に聞き覚えは無い。声は幼い。ゆつくりとしかし確実に紅莉は肺に新鮮な酸素を送り

込んで平らな地面の足元を確かめながらゆっくりと立ち上がる。

一体今のは何だったんだろうか。たった数分経った今になるとあれほど暴れ狂って自己を主張していた心臓は平常に戻りつつある。

「えつと……」

現状を整理する。実家に帰って来て、夕飯を食べて、家族と団欒を過ごして、気ままに蔵へと赴いて——今だ。

ならばこの聴き覚えのない声の主は一体誰なのか。

「こんばんわ。召喚に従い参上したわ……とでも言えばいいのよね？」

——召喚？ それ以前にこの女の子は一体誰なのかしら。一体どこから家の敷地内に入ってわざわざこんな庭の隅にある蔵まで来て私に話しかけているんだろ。

「……？」

少女は首を傾げる。

年齢は十歳ぐらいだろうか。年相応の可愛いドレスを着て背中には蝙蝠のような羽がある。お洒落の一環なのだろうか。

「えつと……」

「何よ、はつきり言いなさいよ」

随分とスパツと言う女の子だ。

「どこから来たの？ 迷子なら……」

紅莉がそう言ったときには女の子は笑みが嗜虐的な、とても容姿相応の女の子ならそんな感情は知らないはずの表情を作った。

「ねえ、腕見せて」

「腕？」

「早く早く」

言うがままに紅莉は少女に向けて両腕を提示すると少女はこちらの腕を観察すると、こちらの右肘を指差した。

「見つけた。やっぱりあなたがマスターね。何も分かっていないようだけど」

紅莉は指を指された右肘を見ていると赤い痣があった。こころなしか脈動に合わせて明滅しているように見える。さっきの過呼吸の後遺症……なわけがない。この痣は一体なんなのだろうか。

「ま、私を召喚するぐらいなんだから少なくとも正規の参加者じゃない事は分かり切ってるんだけど」

「何を言ってるの？ お父さんとお母さんとはぐれちゃった？」

「あなた、名前は？」

「へ？」

「だから、名前は？」

辟易としたように少女は問いかけてくる。なんと態度がでかい少女だ。しかし否定する気にもなれず紅莉は素直に答える。

「……越奈田 紅莉」

「レミリア・スカーレットよ。よろしくねマスター」

少女はあどけない笑みで紅莉を見上げてそう言った。

「なあ、ベル！ 夜の空ってやっぱり良いな。風が気持ちいいぜ！」

夜空には一筋の光が尾を引く。それはさながら流れ星や箒星のように見えるがその実、その光を放っているのは本当に魔女の箒だった。

「ちょ、おいおいライダー！ 確かに地形把握に連れて行ってくれとは言ったがこんな高所じゃ見えるものも見えないぞ！」

ライダーと呼ばれた白黒の魔法使いは金髪を風になびかせながらもさらに自身が跨っている箒のスピードを上げる。加速。それは乗り手であり使い手であるライダーからすれば何ともなくとも同乗者でしかないベルと呼ばれた男性にはある種次元が違う意味が付加される。

「ぎっ……!!」

少しでも気を抜けば箒を握っている手が滑って落ちてしまいそうで、さらにその握っている手の握力が既に限界に近いと来た。風が流れて生半可な声ではかき消されてしまう。

「魔理沙！ す、すまなかった!!」

「分かればいいんだ分かれば」

そうして箒は次第に減速し少しずつ高度も下がっていく。

何故サーヴァントに振り回されねばならないのかと頭を抱えながら、ベルもとい、ベル・ジュードオットは小さくため息をつく。サーヴァントの召喚に成功したのはいいがまさかこんな少女を引き当ててしまうとは。しかも明らかに魔術師のような格好をしており、ライダーもとい魔理沙も自身を魔法使いだと言っている。ベルと言う魔術師と同じ意味合いだろうか。

なのにクラスはライダーときた。こちらをからかっているのかと一時間ぐらい問いただしたいがこの箒を見る限り本当にライダーのようだ。というよりまた反論をすればどうなるか想像難くない。

「それにしても……………この賦氣って街も随分と不思議なところだ。今どこきここまで見事に都市と自然が融合した街なんて見たことがない」

ベルは考える。ここでライダーの實力を發揮させるにはどのような作戦が有効的なのだろうか。今の知りうるライダーの戦力はこの箒。圧倒的速度は恐らく他のサーヴァントよりも群を抜いているだろう。速さを活かすのなら市街地などではなく、やはり今いる空中のような行動に制限のかからない場所が望ましい。

「まあまあ、細かい事は抜きにして初めての空の旅はどうだマスター？」

「ん、悪くは無いがいかんせん危険だな。それに今の時代は飛行機というものがある。もっと安全に空の旅を楽しめる優れ物だ」

「ああ、だってこの第一人乗りだからマスターが乗るスペースは本来無いんだけどな」

「だから俺は今、命綱もなしに箒にぶらさがって空中遊覧してるんだけどな！」

「地形把握したいって言ったのはマスターだぜ？」

「もつと他にやり方というものがだな……………まあいい。これぐらいでいいだろ。目的は達成したしそろそろ戻ろう」

ベルのその意見に魔理沙は反論する。

「もう帰るのか？ つまんないな」

「つまんないも何も他のサーヴァントに察知されたらどうするつもりだ。今はとりあえず可能な限り穏便に済ませるのが方針だ」

「あー、分かった分かった。じゃ戻るぜマスター」

そして箒は急加速を行った。

梶垣^{かじかき} 沙織^{さおり}は賦氣市にある紅色を基調とした洋館の使用人を務めている。洋館の主の名は淵谷^{ふちや}真琴^{まこと}。

その洋館——淵谷邸の主はとある企業の社長でありもちろんこの一帯では金持ちの部類に入るのだろう。でなければ梶垣のような使用人を雇う余裕がどこにあるのか。

梶垣は夕食が終わったあとのテーブルの片づけを行い、厨房で皿を洗っている。他の使用人は休憩時間に入っているが別段不満もない。むしろこの程度の仕事を一人で片づけられずに何が使用人か。

この屋敷に使用人は梶垣を含めて三人いた。最近になって新しい使用人を、真琴の一人娘の満月^{みつぎ}が独断で雇ったからだ。

別にお嬢様——満月の独断が気に入くわないというわけではない。むしろ驚いているのだ。今まで大人しく寡黙で実際の年より遥かに大人びていたお嬢様が珍しく我俣^{わがまま}を言い、更にはこの我俣以降、大人しかったお嬢様が今までとは打って変わって饒舌になり性格が百八十度変わったようだった。これには使用人どころか真琴や奥方すら驚いていた。

お嬢様が変わったのはあの使用人が来てからだ。あの銀髪の、蒼い目をした明らかにこの国ではない使用人はお嬢様とどのような関係があるのだろうか。

「……よし」

悩むのなら直接本人に訊いた方が遥かに早いという思考に至るのに費やした時間はわずか数秒。丁度食器洗いも終わったのでこのまま彼女のところへ行こう。

屋敷の中は広いが熟知している。伊達に三年間勤めてはいない。

そして新米の使用人がどこにいるのかも大体は分かっているつもりだ。

梶垣の予想は当たっていた。新米のメイドは屋敷の広間のような玄関の正面の階段を上がった先にある部屋にいた。まるで玉座の間のようなそこは常に重苦しく荘厳な雰囲気包まれている。

新米メイドの後ろ姿を視認して少し安心に似た目的達成の安堵感を得た途端、その姿を見失った。まばたきをした間に見失ったのだ。そもそもこの見通しのいい部屋でそんなことあるはずがない。

「どうもこんばんわ梶垣さん」

声がしたのは後方。部屋の中ではなく廊下だった。

「……は？」

今日の前に彼女はいたはずだった。いや、いた。確かにいたしそれは紛れもない真実だ。ならばどうやって彼女は今、まばたきをする程度の時間で自分の後ろまで移動したというのか。瞬間移動としか形容のできないそれは明らかに常識を超越したものだった。

「今日の夕食後の当番は梶垣さんでしたね？ お疲れ様です」

「え、ええ……………ありがとう」

銀髪の使用人は笑顔で、しかし底に得体のしれない何かを秘めたそれで梶垣に対して会釈をする。

「私は他の仕事があるのでこれで失礼致します」

「ええ、お疲れ様。あなたも早めに休みなさいね」

「ありがとうございます」

再び会釈を繰り返して銀髪の使用人は廊下を歩いていく。その背中を見ていた梶垣はいつのまにか寒くもないのに震えていた肩を落ち着かせた。

こんこん、と木製のドアをノックする小気味の良い音がした。部屋の主から入室の許可を得ると銀髪のメイドはゆっくりとドアノブを回して入室する。

「守備はどうですか？ マスター」

「いやあ……私まだ半人前だからそんな大層なことはないよ」

この部屋の主である若い女性——この屋敷の主の一人娘の淵谷満月は自嘲気味の笑みを浮かべた。

「えっとさ、アサシン……いや、昨日思い出した名前で呼んだ方がいいのかな？」

「どちらでも結構です」

「じゃあ咲夜って呼ぶね。あれから何か思い出したの？」

咲夜と呼ばれた銀髪の使用人は顔をしかめる。

「いえ特にはなにも……自分の名前と自分がどういう人であった

かは思い出せますが、過去の記憶が欠落しています」

「私の召喚が乱暴だったからだね……………本当にごめん」

「いえ、生活や戦闘には支障はないので大丈夫です。むしろ余計なものが無いのでむしろ戦いやすいかと思っています」

「そうなの……咲夜がいいのならそれでいいわ」

満月は改めて咲夜の目を見る。

「さて、少し魔術の練習をしないと……咲夜、少し付き合ってくれる？」

「ええなんなりと」

満月は自身の中の魔術回路を呼び起こす。起動確認。魔力を流し込んで活性化。そして紡ぐ。

「^{イージス}専守防衛」

師は言っていた。

——いいか、確かに月夜は常人より魔術回路が少ないから出力が足りない場合がある。だが気にするな。お前は天才だ。

師は言っていた。

——魔術詠唱と言うと形式ばって聞こえるが実はそうじゃない。詠唱とは自己暗示みたいなものだ。自分はできて当然と思い、不可

能を排除することから魔術は生まれる。つまり自分のセンスで詠唱なんて適当でいいんだ。

この身にある12の魔術回路が目覚まして魔術をもって不可能を可能にする。その不可能とは咲夜がたった今こちらに向けて一本のナイフを投擲してきた。それは人を超越するサーヴァントが放つたもの。手加減をしているといえどそれは人間にとって必殺に成りうるものであるが。

ナイフは満月の目の前に突如として現れた盾に阻まれはじかれてしまった。

咲夜は弾かれたナイフを回収すると嘆息する。

「盾属性の魔術……この目で見ると未だに信じられませんよ」

「ふう、師匠は一秒以下で発動させるなんて言うけどそれ無理でしょ」

「むしろ魔術を習い始めて数ヶ月で私のナイフを弾く硬度のものを顕現できるのであれば充分な才能ですよ。タイムはまだ気にしてはいけません……聖杯戦争ではなければ、ですが」

満月は嬉しそうにはにかむと、肩を落とす。

「そうだよね……聖杯戦争なのに甘ったれた事は言えない。もっと頑張らなきゃ」

「ええ、頑張ってください」

そして満月は再び魔術の修練を開始する。

【一章滿了】

9月29日

「あら、こんばんわ。どうしてまたここに来たの？」

桜の木の下で女性がこちらに振り向いた。

「おばちゃんに……会いたかったから」

「お……おばっ……！」

憤慨したように、しかしすぐさまその様子を収めると最初のような笑顔を取り戻す。

「私はあなたのような人間じゃないから、あなたを食べてしまうかも」

「……………？」

首を傾げた幼い女の子に対して、藍色の着物を少し着崩した艶やかな女性は苦笑する。

「まだ難しいのかしらねえ」

「……なんで、ここにいるの？」

「あらら、ズバリと訊いてくるじゃない。幼いのに賢いのね」

ただ黙って真つ直ぐと、自分の目を見て返答を待つ少女を見た女性はやつくりと言葉を紡ぐ。

「会いたい人が……いるのよ。会えると思っていたのに、会えなかったの」

「じゃあ、ふーかもいつしよに探してあげる！」

「そう、お願いね？」

一陣の風が吹く。この場にいるものを攫うかのように流れ通り過ぎていく。その風に乗って桜の花びらが宙に踊り月明かりの夜空を彩る。

その光景を見ていた少女が視線を戻すと、女性はやつくりと言葉を紡ぐ。その光景を見ていた少女が視線を戻すと、女性はやつくりと言葉を紡ぐ。その光景を見ていた少女が視線を戻すと、女性はやつくりと言葉を紡ぐ。

夢を見ていた。目覚めはまるで時間旅行を経たような奇妙な感覚で言葉では説明しづらいものだった。

頭が冴えてきても布団から出ずにただ左手を天井へ伸ばす。左の甲を返して平を見るとそこには何かを象った抽象的な赤い痣がある。

「おはようございます風花」

「おはよう……妖夢」

この常時帯刀している同性で同年齢ぐらいの同居人については昨日より少し慣れたかもしれない。

「昨日はずっと部屋に居ましたが今日はどうするんですか？」

妖夢の言うとおりだった。

昨日は結局学校にも行かずにただずっと部屋に籠ってただけだった。

「えっと……」

どうする、との問いかけに返答のしようがない。

この問いかけの真意は“聖杯戦争に参加したマスターとしてどのような行動を起こすのか”だ。そんな常識が通じないものに対してどのような結論を出せばいいのかなど想像もつかないからだ。

十分過ぎても結論を出せず進展は全くない。

時間は7時27分。今から急げば遅刻は免れる時間帯だ。

「……学校に行くよ」

「その意味を訊いてもよろしいでしょうか」

「えっと……」

また言葉に詰まるマスターに対して妖夢が溜息をついたと同時に、しかしマスターは続けた。

「学校には、香菜子が……他のサーヴァントのマスターがいるはずだから」

「しかし日中で私たちサーヴァントは戦闘を行う事ができません。人目につくのを避けることが第一優先です」

「闘うんじゃないかって話しあいをするの」

「え？」

「私は何も知らないマスターだから、他の人ならちゃんとしたことを知ってるかもしれないから」

少しの間。音は時計が秒針を刻む音だけ。

「何を言っているんですか風花！！」

秒針が5回ほど刻んだのち、発せられた音は怒号だった。

「いいですか？ あなたは非力なただの人間なんです。何の因果かは知り得ませんが聖杯戦争に巻き込まれてしまったただの一般人なんです！ 何の力も持たないあなたが他のマスターと相対するなど言語道断です！！」

その剣幕はもはやただの威圧感ではなく肌を感じる圧力として風花を圧倒する。

「大丈夫。私には妖夢がいるんだよ？」

しかし、その剣幕に圧されながらも笑顔ではつきりと澄んだ声で言ったその言葉に、妖夢は黙ることしかできなかった。

そして一昨日とは違い、遅刻ギリギリで教室へと滑りこんだ風花はいつもの日常に身を投じた。サーヴァントや聖杯戦争などと難しい事は考えなくていい日常はとも心地が良かった。友人と話したりするだけで心が少しだけ軽くなる。

その光景を霊体として傍から見ていた妖夢は思う。

——これこそが本来風花にあるべきもののはずなのに。

巻き込んでしまったのはサーヴァントの所為ではない。形や経緯はどうあれサーヴァントを召喚したマスターの自己責任だ。それでも悔やまずにはいられない。

——これほどに優しい人が血なまぐさい殺し合いなど……。

できるはずもない。その言葉の思考を呑みこんだのはあり得ないことを期待するためののか、その他なのか。妖夢自身が断定することのできない感情だった。

「え、今日、香菜子来てないの？」

「そうそう。昨日も休んでたんだよ。風邪をこじらせたみたいだつてメールで話してたけど」

「そっか、ありがとう」

風花の話を聞いている限りはアーチャーのマスターはどうやら学校には来ていないみたいだ。そこまで簡単に倒させてくれる敵ではないのは分かり切ってることだ。

そして2限目開始の鐘が鳴る。

マスターとサーヴァントの間には特別な回路が成立している。これはサーヴァントを現界させておくための魔力をマスターが提供するものでもあるがこれを少し使い方を変えれば、少し特別な“繋がり”となる。これのおかげでサーヴァントに危機が及んだ場合、マスターに危機が及んだ場合、どちらにしても片方に直感的に知らせるためのものともなる。

両者の距離が近い場合なら簡単なコミュニケーションが取れる程度にはなるはずだ。

『妖夢妖夢、聞こえてる?』

『ええ聞こえていますよ』

『うわー、本当だ……魔術って凄いね』

『厳密には魔術とは少し違うんですが、風花にはそのニュアンスの方がしっくりくるんですね』

授業中。風花の席は窓際から二列目、後ろから二番目の場所だった。

それにしても、と妖夢は思う。今のこの光景が幻想郷で言う寺子屋というのはいささか驚いた。とても規模の大きい校舎と呼ばれる建物に四桁の数の風花とほぼ同年齢の人がここに毎日通っているのだ。

——サーヴァントとして現界したことで知識はあっても経験は無いですからね。

サーヴァントというものはあらゆる時代からの英雄などを呼び、マスターである魔術師が役するシステムである。あらゆる時代から来るのなら当然数百、数千年前から現界するサーヴァントとして少なくは無い。ということでサーヴァントは召喚された時代に不自由なく適応するためにその時代に合わせた知識を前もって持っているのだ。

妖夢でも遊園地や学校、映画館や水族館などの娯楽施設は知っているが見たことは無い。ただ噂程度にこんなものがこのようにして使われていてこの時代に存在していると理解できるだけだ。

『あれ、妖夢？』

『すいません、少し考え事をしていました』

思考回路が少し共有できると言って相手の思考そのものを読めるということではない。何のデバイスも無く心の中で電話してるといったような感覚だ。

『やはりアーチャーのマスターは来ていないのですね』

妖夢はチラリと風花の席の右斜め前、この教室に一つしかない空席を見た。

『……うん、香菜子は来ていないみたい。やっぱり神社にいるのかな』

『そう考えるのが妥当でしょうね。しかし神社に行こうとは思え

ないで下さいよ風花』

『え、なんで?』

『いいですか? あの神社はアーチャーの拠点となっています。そして拠点というものはあらゆる状況に対する対策が万全を期せるほどの設備があるものです』

『ええと……つ、つまり』

『敵の要塞に何の策も無しに踏み込めば、一瞬で蜂の巣、です』

『うん、今ですつごく分かったよ、ありがとう』

不満を言いたげにしている風花だがシャープペンシルをくるくると器用に指の間で回しているだけだ。どうやってるんでしょう。

粗末な疑問は置いておいて今はマスターとして何も知らない風花に最低限の知識を詰めるべく妖夢はふたたび話しかける。

『風花。宝具というものはご存じ……』

『無いです』

『それでは説明します。聖杯戦争を続ける上で切っても切り離せない重要なものです』

『ほうぐ……ってどんな字なの?』

『宝^{たから}に道具の具です』

『あ、そう書くんだありがとう』

『話を戻しますね。宝具というものは簡単に言うと私たちサーヴァントの奥の手——必殺技とでも思ってた下さい』

『おー、なんかそれっぽいね』

『この宝具というものはサーヴァントが生前、何か偉業を残した際に伝説となりますね。分かりやすい例えでいくと……アーサー王のエクスカリバーとか』

アーサー王と聞くといなや風花の調子が少し上向きに変化した。盛り上がっているようだがここは自分のペースを保とうと妖夢は決心する。

『アーサー王かっこいいよね！ ああ、私も円卓の騎士になりたかったって中学校の頃はずっと思ってたし』

『もしアーサー王がサーヴァントとして現界すれば彼の象徴であるエクスカリバーが宝具となります。つまりそのサーヴァントにまつわる伝説や伝承が形として具現化したものが宝具なんですよ』

『うわぁ……凄い。私アーサー王と会ってみたかったな』

『風花？』

妖夢の声が低くなった。確認の意というよりもまだ続けるのか、という警告の意に近いそれに風花も流石に自重をした。

『ごめんごめん。で、もちろん妖夢もその宝具を持っているんだよね?』

『ええ、基本的にサーヴァントには宝具が一つあります。稀にあゆる伝承や伝説が複数あるサーヴァントならば複数の宝具を持っていたても不思議ではありませんが。ちなみに私は二つですね』

『おおー、私妖夢のことは知らないけど私には想像もつかないような偉業をしたってことだね?』

その言葉を聞いた時、霊体化していて表情がうかがえないはずの妖夢が目を伏せて口を噤んだような気がした。

『……ええ、偉業と言えば偉業、なのでしょう』

『どんな偉業を……』

『どちらにしろ、主君を守り切れなかった私には偉業と言つ言葉なんて重すぎるのです。さあ風花。授業が進んでいますよ』

風花の声を遮って淡々と事実を述べたセイバーのサーヴァントは、マスターに日常への回帰を促した。

今日の授業はすべて終了し放課後となった現在。風花は鞆を持って足早に教室を出ると学校内に停めてあった自転車にまたがって、目的をもったような進路で賦氣市を走る。

秋風が年頃の女子にしては短い風花の黒髪をなびかせている。

『どこへいくのですか?』

すぐ横から妖夢の声がした。今でも霊体として傍にいてくれてい

るのだろう。自転車と同じスピードで走ってるみたいな感じなら驚いて転倒しているだろう。

それはさておき妖夢の質問に答える。

「アーチャーのマスターのところ、だけど」

『……っ！！』

二秒後に怒号が飛んできそうだったので風花は慌てて弁解する。

「わ、私にも考えはあるよ。明るいうちは戦っちゃ駄目っていうルールなら今でも大丈夫なはずだね？ それに香菜子の神社がある山はこの街のどこからでも見えるから、その……一昨日に妖夢が戦った時みたいにあんな派手なことは流石にできないと思うんだ」

『……いざという時に備えてすぐに撤退できる用意はお願いします』

「妖夢が私を担いでくれればいいんじゃないの？」

『信頼されるのは嬉しいですが私とて万能ではないのです。それを知っておいてください。先程も言ったとおりには私は自分が仕えていた主さえ守れなかった未熟者なのです』

妖夢の悲しげな声が風花の耳を刺激した。さっきの授業から妖夢の様子がおかしいが風花には心の内など知る由もなくまた、知ろうとする権利すら無いように思われた。

一昨日にも来た神社がある山頂へと続く舗装された坂道。そこで風花は自転車から降りた。

「ここからは流石に歩いていこうかな……この坂は自転車だと厳しいだろうし」

「分かりました。では行きましょう。日没までには時間もありません」

風花の横に現れた妖夢はしっかりとマスターの横について歩き始める。舗装された道の両脇は鬱蒼と木が生い茂っている。秋にはここにある木々の全てが紅葉して美しい景色になるのだが冬はまだ遠い。ただ黙って10分ほど歩き続けたところで妖夢が突然歩みを止めた。

「どうしたの妖夢？」

「……この先に結界があります」

「結界？」

「ええ、噛み砕いて言うのなら……結界にも様々な種類がありますが、この種類の結界は中で起こったことの一切が結界の外には認知されないものですね。人払いひとはらいと呼ばれるタイプです」

「じゃあさ、この先に見えない壁があったりするのかな？」

風花は虚空に手を伸ばして手さぐりでゆっくりと進んでいくが、妖夢が慌てて風花の手を引いて後ろへと引き戻す。

「な、なな何をやっているのですか一体!？」

「え、結界って目に見えない壁があるんじゃないの？　ぶつかつたら痛いだろうし慎重に進もうと思ってさ」

妖夢が慌てている声にも関わらず風花は至極当然のように涼しく訊き返した。

分からないなりに思慮深く考えているのかと思いきや、考えなしに行動する一面があるのはどうしたことか。

「いいですか風花。結界というのは目に見えない境界……境目です。壁のような実体はなくてもただ外と内を魔術によって線引きするだけで効果が生まれるのです」

思ったとおり風花はまるで理解できていない様子なので妖夢は説明を続ける。木々の隙間から鳥たちが一斉に秋の空へ羽ばたいていった。

「つまり風花の思っているような壁などはなく結界の中と外は出入りが自由なのです。もし今のまま風花が進んでいたのなら、ただの馬鹿のように敵の縄張りへ行つて餌にしてくださいと言っているようなものです。さっきの私の話を本当に聞いていたんですか？」

「あー、うん大丈夫大丈夫、今だって妖夢が引き止めてくれたんだし」

「だから……！」

まだ紅葉すら始まっていない青い葉が秋風に揺られてザワザワと合唱を始める。

風花ですら分かる。妖夢の持つ空気が変わった。その証拠に妖夢の右腕が背中に背負われている長剣の柄へと伸びていた。

「よ、妖夢……」

「絶対にその場から動かないでください」

「なんだいなんだい、つまんないねえ。あと少し進んでくれればこっちも暴れることができるのにさ」

風花たちの前方にまるで幻のように現れたのは背中に締縄を背負った背丈の高い女性だった。

セイバーとアーチャーとの距離は約10メートル程度。そしてアーチャーが現在立っている位置こそが。

「そこが結界の境界ですか」

シャツ、と刀を鞘から抜いた時に発せられる金属の擦れる音。

妖夢が背中に背負っていた長剣を静かに抜いて両手で構える。

風花は妖夢の背後に隠れるようにしているがセイバーは強く凛々しい声で応える。

「大丈夫ですよ風花。相手が本気なら今頃は戦闘中ですから」

「ああそうさね。こんな日も落ちない時間から仕掛けてくるなんてセイバーのマスターは随分と聖杯に御執着だと感心してたんだけどねえ」

「私のマスターは我欲のために行動する様な人ではない！」

「ふーん、未熟者の見たことなんて信じられないね。私のマスターにも友達と言って騙していたんだろう？」

「貴様……！」

そして妖夢は神奈子の懐へと潜り込んで長刀を横一閃に振り切る。しかし神奈子は後ろに跳んで回避してその勢いで上空へと浮遊している。

「ほら、鬼さんこちら。手の鳴る方へ」

パンパンと拍手する神奈子の後方では無数の御柱が出現し妖夢へ向けて待機し始める。そしてそのうちの一本が射出される。それを冷静に見極めて回避した妖夢は地面を蹴って浮遊している神奈子へと斬りかかった。

しかし妖夢が空中にいる時を見計らって御柱が一斉に射出される。その数十。

「あああああつ……！」

長刀を振るう妖夢はしかし、御柱を斬ろうとはせずに飽くまで方向を逸らす程度に留める。そしてその御柱を足場にして更に神奈子へと肉薄する。

「頭に血を昇らせすぎだよ未熟者」

真横から襲来した御柱にギリギリ反応で来た妖夢はかるうじてガードをしたまま、そのまま御柱に吹っ飛ばされる。

そのまま地に落ちた妖夢は憎悪の籠った目で神奈子を見上げる。がふと両肩に優しい温もりを感じた。

「大丈夫だよ。妖夢は弱くない。妖夢が尊敬してた人を守りきれなくて後悔しているんなら私を守って。私が妖夢のマスターだから、私を見て、私を守って」

背中越しに伝えられたその言葉は過去の妖夢を否定するものだった。しかしそれでいいのではないのか。今この瞬間、仕えるべきなのは風花であつてもう会う事の出来ない人ではない。

この戦いの果てに会う事ができない人に会う事ができる。ならば——今はこの言葉を心から信じてみよう。

「当然です。私は最強のサーヴァントですから」

そして腰に下げていた短刀を引き抜いた。

「……手加減はしません」

「もしかして今まで手加減していたのかい？ 失礼な未熟者だよ全く」

「ハアッ！」

両手に剣を構えた妖夢は再び神奈子へ斬りかかったが、やはり神奈子の背後から御柱が射出され妖夢に牙を剥く。

妖夢は両の剣でいなし、動いて回避し、飛んでくる御柱を足場にして神奈子の懐を目指す。

神奈子は感心する。

——さつきとは動きがまるで別人じゃないか。あのマスターの女の子、やるねえ……。

「弦月斬！」

真正面から迫る御柱を弾くために、上方へ斬りあげて御柱の進行方向を逸らしそしてそれすらも足場にして神奈子へとさらに接近する。

「この御柱一つ一つが宝具ですね……恐らくBランクまたはそれ以上相当の非常に強力なものです」

「ああ、その通りさ。でもそれがどうしたんだい？ “ゲート・オブ・オンパシラ神の象徴”をどうにかできるとでも？」

「ええ、その通りです」

そして妖夢は神奈子の御柱を真つ二つに斬り裂いた。そしてさらに接近する。

「なっ……！？」

驚きを隠せない弓兵に剣士は一太刀を浴びせることに成功した。しかし浅い。神奈子の衣服を斬っただけに過ぎない。

「ああ、あんた……強くなったね」

そして神奈子は振り切った後の隙だらけの妖夢を力の限り、殴った。

「恥じることは無いと思うけどね。私に一太刀浴びせたんだ」

「あなたに勝たなければ幽々子様に会うことすら叶わないのに、

その程度で喜んでいられません」

「未熟者あがりが喜ぶるとでも？」

そして攻防は激化する。雨とでもいうべき宝具の数で圧倒する神奈子に対して、最低限の動きだけでかわし、いなし、反撃の隙を窺う。さらに。

「現世斬！」

瞬間に両手の刀を鞘に収め長刀だけを抜刀する。魔力をまとった刀の居合斬りは神奈子の御柱を両断して妖夢の進むべき道を作る。

「その刀……あんたの生きている時と能力が違っさね。さしずめ今は……その二振りの刀のランクほつく以下のものを全て斬り伏せる、あたりかね」

「……」

妖夢は沈黙を決め込むがしかし。

「そのだんまりは肯定だね。さらに刀に魔力を纏わせることで宝具のランクを底上げすることによって能力の幅を広げることができる。だから私の御柱が斬られたんだね」

「小難しい説明、ありがとうございます」

「あんたの腕次第で宝具の威力が決まるなんて皮肉だね。未熟者に使いこなせるものじゃないだろうに」

「五月蠅いですね……未熟者未熟者と」

妖夢の目の前に御柱が垂直に落下するが、妖夢は足で急制動をかけてその勢いを利用して上へと跳躍する。そして御柱の先端に足をつける。とまた神奈子へと肉薄を開始する。

が、気づく。妖夢の視界の端、御柱の雨が一切降っていない場所に風花とアーチャーのマスターが二人で話している事に。

「じゃあ、風花はただ巻き込まれただけなの？」

妖夢が相手のサーヴァントを引きつけている間に香菜子へと事情は説明した。あとは香菜子が信じるか信じないかそれだけ。

「うん……いきなり妖夢が目の前に現れて……」

「信じられない」

「え……？」

その否定の言葉に、風花は耳を疑った。

「サーヴァントを召喚するためには儀式が必要なの。それに一般人には無い魔術回路が必要なの……じゃあ一般人だった風花は何で魔術師しかないはずの魔術回路を持っていたの？」

「そ、そんなの知らないよ！ それに香菜子だって見たじゃん！

私はあの時、土砂崩れに巻き込まれそうになっていた……」

「それが信じられないんだよ。サーヴァントの召喚には儀式が必要だって言っただよ。そんな何の準備も無いまま召喚するなんて有り得ない……それに」

香菜子は言う。

「確か風花って怪我してたよね？」

「あ……………」

「遠目で見ても大丈夫じゃないほどの怪我だったのに、どうしたの？ 治癒魔術でも使ったの？」

「違う、違うの……私も知らないから、だから」

「帰って！ じゃないと私はあなたを敵とみなしてアーチャーに殲滅命令を出す！」

そう言っ、香菜子は右手の甲にある赤い痣——令呪を風花へと見せつけた。

「待って……香菜子……」

「アーチャー！」

妖夢に向けて待機させていた御柱の内一本の方向を変えて風花へ

向けて射出した。

それと同時に動いていた妖夢は御柱の後ろを追いかけ行くが到底間に合わない。

——間に合え、間に合え！

そして御柱が風花の間近に轟音とともに落下した

「ありや、手元が狂っちまったかね」

「風花！」

この好機を逃すはずもない。妖夢は風花を抱きかかえて結界の中から離脱する。

「ねえ神奈子様……」

「なんだい？」

「あの最後の攻撃、外してくれてありがとう」

「……私に謝るなら友達を信じてやんな、マスター」

そう言つてアーチャーは香菜子の頭をくしゃくしゃと少し乱暴に撫でた。

アサシンのサーヴァント、十六夜咲夜はマスターの自宅である淵谷邸のキッチンで紅茶を淹れていた。時刻はもうすぐ午後三時を回るうとしてゐる。午後のティータイムでもしたらマスターの満月もリラックスしてくれるだろう。

まだ魔術を習い始めて日も浅いらしいので聖杯戦争で気を張り詰め過ぎて倒れてしまったらどうしようもない。

「茶葉は確かこの辺、だったかしら」

記憶を頼りにして保管場所を探し当てると、あらかじめ温めておいたポットに茶葉を入れて、新鮮な水を沸騰させた湯をポットの中に注ぐ。茶葉の豊潤な香りが咲夜の気持ちすらどこか懐かしいものにさせる。

そして淹れた紅茶は二人分。おかわりもできるようにポットにもまだ余りはある。それらをトレイに載せてキッチンを出ると真っ直ぐに紅茶を飲むべき人がいる場所へと行く。そして着いたのは木製の扉の前。二度ノックして扉を開ける。

ふと、この紅茶はマスターのために淹れたものだったはずと思っただが、そうならわざわざ二人分も淹れる必要が無い。これはこの部屋の主のために持ってきたものだ。ノックを二度して痛んでギイと軋む木製のドアを開けた。

「パチユリー様、午後の紅茶をどうぞ。小悪魔も本の整理を休めて……」

ドアを開けた先に広がるのは埃が充満している物置だった。紅茶の香りと埃の臭いが混ざってひどく不快だ。棚などには埃が厚く積もった多くの書物が並んでいる。

「休め、て」

そこには人がいたはずだった。でも扉を開けただけでむせそうになるほどに埃が積もっているこの部屋にとっても人が居座れるはずがない。ましてや彼女は――。

「パチュリーって……誰？ 小悪魔……？」

自問。

トレイが手から滑り落ちて、陶器であるポットとカップが砕ける高い音がした。

霞んでいる生前の記憶が、嗤わらっているような気がした。それから十数分後。咲夜は割ってしまったポットとカップ、そして床の後始末をするとマスターの部屋へと赴いた。

「満月様、少し行ってみたいところがあるのですが」

淵谷満月ふちやみつぎが自室のベッドの上で寝転んで本を読んでいると、アサシン――咲夜がそう言ってきた。

満月はページの文字列から目を逸らして部屋の隅でまるで侍女のように待機している咲夜を見た。彼女は生前は本当にメイドのようなことをやっていたらしく仕えていた主人がいたそうだ。

自分の召喚が不安定だったせいでその記憶すら無いという目も当てられない現状だが、しかし断片的には思いだせるらしく名前や自分がどういった人だったのかということはある程度思いだせたらしい。

今日で召喚してから三日目の朝。段々と記憶が明瞭になってきたみたいだ。そんな時に咲夜がそう言ったのだ。

「どこに行きたいの？ あなたの記憶が戻るためならそれなりの危険は大丈夫だけど」

寝転んで読書をしていた満月が本を閉じて無造作にベッドの上に放り投げると上体を起こして、ベッドから立ち上がり大きく伸びをする。

「記憶が戻る保証が無いのですが」

「あー、まあ、何もしないよりはマシだからさ。どこへ行ってみたいの？」

「この時代には私と同じ従者がたくさんいる喫茶というものがあるそうなので、そこへ行きたいのです」

満月はぼさぼさになった黒い髪を櫛でといてヘアゴムでポニーテールにしながら咲夜が行きたいという場所の見当をつける。

——メイド喫茶なんてこの近所にあったかな。

そして結論から言うのならメイド喫茶は近所にあった。

少し陽が傾いて気持ちのいい快適な気温を作り出している賦氣の街に繰り出して、確証のない目標だけを持って歩いていたらあった。あってしまった。

ちなみに咲夜はこの間ずっと実体として満月の傍にいた。「従者たるものマスターの安全と快適はいつでも保証できねばならない」だそうだ。こんな下らない事を止めさせるために令呪を使うなど論外だ。しゅしゅ承諾したのはいいものの、そうしたことでは街中を歩いている時はずっと周りの人から好奇の視線が注がれていた。

今どき街中でメイド衣装なんて着ているのはメイド喫茶の店員か

物好きな人だけだ。

「ふむ、ここですね」

咲夜は興味深そうに店の外観を見るとさっさと店内へ入っていつてしまった。満月の気持ちとは裏腹に店の来客を知らせる鈴は軽やかに役目を果たした。

「え、ちょ、咲夜！？」

目標だけを持って街へ繰り出した満月には当然、財布など持ち合わせていなかったが成り行き上、仕方なく咲夜の後ろについていく。

「お帰りなさいませご主人様ー」

そして出迎えの声を聞いた咲夜の肩がピクリと動いたのを満月は彼女の背中越しに見た。

「に、二名様ですね？ 席にご案内いたしますー」

「……」

頬の引きつっている店員に案内されるがままに満月と咲夜は最大で四人まで座ることのできるテーブル席へと腰を下ろした。

案内したコスプレをしている同年代か少し年上ぐらいの女の子も戸惑っている様子だった。まさかメイド喫茶にメイドが来店するなんて夢にも思わなかっただろう。

「ご注文が決まりましたらお呼び下さいませー」

店内は木造落ち着いたシックで上品な調子で統一しており、ウェイターがメイド服を着ている以外は普通の喫茶店より上かもしれない。満月はもっとド派手なピンク色などと思っていたが良い意味で肩透かしを食らった気分だった。

しかし四人掛けのテーブルの向いに座っている咲夜は明らかに不機嫌であり、ロクにメニューを見ようともしずにただ目を伏せている。

「従者^{メイド}とは主人に媚びる者ではなく尽くす者です」

唐突に、しかし不自然無く咲夜は言った。それは怒りでは無い。憤りでも憎しみでもない。ただ諭すように淡々と。この言葉は彼女にとって当然を言っただけなのだろう。そして誰に向けてでも言ったものではないのだ。

「すみません、このアップルティーを……」

だから彼女は変わらぬ調子で注文を進める。己のサーヴァントの蒼い相貌を何となく見ていた満月は脳裏の片隅で現状把握を始める。咲夜がメイドさんと呼び止めた。注文をしている。注文をしている。

「ちょ、ちよつと待つて咲夜！」

「どうかされましたか？ 満月様」

「え、あ、いや、その……私まだ注文決めてないからさ。あとでまとめて注文しようよ」

「それならば私が先に注文しておいてもよろしいのではないでし

ようか？」

「だ、だからさ……そう何度も注文いれると迷惑だしさ、まとめて注文した方がいいじゃない、ね？」

「それもそうですね。すいません、後で注文しますので……」

咲夜がメイドに断りを入れたのを確認した満月は内心で安堵する。聖杯戦争以前にここで警察沙汰になてなれば面倒くさすぎる。

この無銭飲食をしかねない状況をいつたいどう切り抜けようかと頭を抱えているとふと正面からの視線に気づく。その位置にいるのは人物はもはや分かり切っている。

「どうしたの咲夜？」

「いえ、満月様がどのような注文をするか気になったので」

「うーん、どうしようかなと……」

メニューとにらめっこをしながら実際はこの状況をどう切り抜けようかを思考する。いつその事本当のことを言ってここはこのまま店を出るとするのが現実的。

——でも。

こちらを見ている咲夜に対して現状をその方向に話を持っていくものならどうなるか。

——いやいやサーヴァントに対する気づかいなんていらない。これじゃどっちが主人マスターなのよ。

「満月様、具合が悪いのですか？ それならばすぐにも屋敷に戻った方が……」

咲夜が顔を伏せているこちらを覗き込むようにしてきた。

「あ、いや……少し考え事をしてただけだから……」

——何を言っているの私……！？

好機を逃してしまったと後悔した時には遅かった。

咲夜は「そうですか」と一言を残してまたこちらをジッと見ている。蒼い相貌が矢のようにこちらを射抜いてくる。

時間にして十秒が経過したぐらいだろう。その極短い時間のあとに咲夜はスツと衣擦れの音すらほとんど立てずに立ち上がって満月の横に来た。

「やはり具合が悪いようですね……魔術の修練で疲れが出ているのでしょうか」

そう言ったあとに。

「マスターの都合も考えずに、サーヴァントの私が我を出して申し訳ございませんでした。以後、このような行動は起こしませんので」

顔を悲痛に歪めて満月に謝罪した。その悲痛が身体的なものであるはずがなかった。

——私の事を考えてくれて……。

師匠は、サーヴァントは道具同然のものだと言っていた。ただ最上位の使い魔を得ただけであってその使い魔に感情を移入することなど無意味だと言っていた。

——違う。

サーヴァントはただの道具ではない。使い魔でもない。私のため

に心を痛め労わって、守ってくれる相棒だ。パートナー

「違うよ咲夜。私は咲夜の記憶が戻るのならこの聖杯戦争を勝ち抜くうえで有利だと判断したからここに来たの。あなたがそんな表情をする必要なんてどこにだって無いの」

「……」

そして、アサシンが作った表情は驚きだった。その様子は暗殺者アサシンなどとは到底思えない一人の女性だった。

「ですが」

咲夜は反論する。

「満月様が疲れているのには変わりはありません。屋敷に戻るべきです。まだ注文もしていないのでお金を払う必要はないはずですので」

「うん、そうだね……店の人には謝らないといけないけど……」

「あんたなんで従者メイドなのに私に媚びたりすんのよ！従者メイドなら主人に尽くしなさい！！」

満月の声を遮って幼い声が店内に響き渡った。

「……不覚でした」

「咲夜？」

満月が己のサーヴァントの方を振り返れば、暗殺者^{アサシン}は右手を胸の前で構えて、五指のそれぞれの間にナイフを挟み、蒼かったはずの相貌が深紅に染まっていた。店外へ足を向けているので咲夜からすれば見えない背後に集中しているはずだ。

そして正面からは満月が死角となつて周りの人に察知される心配は無い。

「敵のサーヴァントです」

ギチ、と咲夜の右手に力が込められてナイフの柄どうしが擦れる音がする。

「申し訳ありません。満月様に気を配っていたために今しがた気づきました」

「……向こうが気づいていないのならこっちが有利だから焦つちや駄目。それにここはもちろん、外にも一般人が大勢いるし陽も高いから……戦闘も行ったら駄目」

「了解しました。……わざとこちらを気づかせます。まず店を出ますので警戒をお願いします」

アサシン組が警戒態勢に入る約五分钟前。

「ねえ紅莉」

それは槍兵ランサーのサーヴァントのマスターへの呼びかけだった。

「どうしたの？」

「このケーキ、美味しいけどメイドの対応が気に入らないわ」

賦氣市の比較的都市化が進んでいる部分にはメイド喫茶が1店ある。そこに越奈田こしなだ 紅莉あかりとレミリア・スカーレットは足を運んでいた。

紅莉はこのどこから来たのかも分からない不思議な少女が不安で、しかし行く宛てのないという少女を見捨てることはできなかった。家族には仕事の一環と偽ってまで居候させてしまった始末だ。家での遊びなのかは知らないが“聖杯戦争”という言葉を使っていた。戦争などと物騒な言葉を少女が使うとは。

現在はメイド喫茶に行きたいというレミリアの要望によってここに来ている。

——こんな小さい子供がこんな所に来たいなんて言うなんて、親の顔が見てみたいわ。

「……クレームをつけても仕方がない」

「なんで理想を追いかけてるあんたがこんな下らないことに妥協すんのよ。一切を妥協しないからこそ理想は現実となるのに」

「……………は？」

そしてこのように何もかも知っているような口調でこちらを諭すようにしてくる。まるで自分より一回りも二回りも年上の人物と話しているかのような錯覚に陥るが、目の前にいるのはやはり自分の

腰より少し高いぐらいの少女だ。

「ただ口がうるさいだけで何の実力も無いジジイどもに、いいようにされてそれで良いのかって言ってるのよ」

「……!？」

——何で……!

そうだ。昨夜の実家の庭で出逢ってからずっとまるで紅莉の人生を全て知っているかのような物言いでレミリアと呼ばれる少女は問いかけてくるのだ。

「良いはずが無い……何のためにあんたはここに帰ってきたのよ。自分がまた闘えるように刃を磨とぎに来たんじゃないの？」

「……」

言い返すことはできなかった。

底の知らない恐怖が紅莉の中で渦巻く。少女が得体のしれない化け物に錯覚する。そして心の臓がこの得体のしれない少女に直に握はかれていような感覚に逃走本能が揺り起こされる。取り返しのつかないことに踏み入れてしまったのかもしれない。

「私はたかが他人のために自分を妥協なんて許さないの。上に立つものなら一つくらい最後まで曲げないで貫きなさいよ」

恐怖はあるが、手の汗は止まらないが、理性は危険だと言っているが、越奈田 紅莉という本能はこれで良いんだと言っているような気がした。

レミリアはそう言って注文したアップルティーが満たされたカッ

プを口へ運び、飲んだ。

「意外といけるわね……咲夜の淹れたものとは圧倒的に劣るけど」

その所作はテレビの中で見たことのある貴族のような振る舞いで、紅莉は無意識に魅入っていた。

「紅茶のおかわりはいかがですかあゝ」

「あんたなんで従者^{メイド}なのに主人に媚びたりすんのよ！従者^{メイド}なら主人に尽くしなさい！！」

それは突然の怒号だった。

ウェイターの女性が驚いてトレイを落としてしまいカップなどが割れて、店内は一瞬にして静まりかえった。店内の雰囲気を出すためのゆったりとした曲調の音楽だけが流れている。

その時間はどれくらいだったのだろうか。次にすべき行動を思いついた紅莉はすぐさま実行に移した。

「す、すいません……！ここに代金置いておくので！」

財布から1000円札を二枚抜いて机の上に置くと、レミリアを抱き上げてすぐさま店外へと出たのだ。

店の外へ出てしばらく大通りを走ってその一角で、紅莉はレミリアを下ろして呼吸を整える。

「なんで店から出たのよ」

「あのままじゃ、店とお客に迷惑に、なりそうだったから、ね……」

息も絶え絶えに、しかし紅莉は続ける。

「誰かを強引に押しのけて、迷惑をかけてまで自分を保つのは間違ってるんじゃないのかな。レミリア」

「……」

「どうしたの？」

「レミィよ」

「え？」

「レミィと呼びなさい。いちいちレミリアなんて呼ぶの面倒くさいでしょう？」

「あ、うん、分かったわ」

そして、この時に紅莉は初めてレミリア・スカーレットの年相応の笑顔というものを見れた気がした。

そして紅莉はレミリアのもう一つの明確な動きを見た。

笑顔から転じて、まるで信じられない何かを見たようにその目を大きく見開いて紅莉の後方を見ているのだ。

「レミリア……？」

レミリア・スカーレットはあり得ないものを視界に収めていた。大通りの人が大勢いる雑踏の中で、銀髪のメイド服姿の女性を確か

に見たのだ。

——咲夜！？

それは見紛うことなく生前のレミリアに仕えていたたった一人の人間のメイドだった。しかし有り得ないはずだ。あの“災厄”のあとに幻想は散ってしまったのだ。しかしそこまで思考したレミリアはそれを否定した。

今の自分は何なんだ。時を越えて、地を越えて、死した運命を否定して亡霊もどきとなってここにいないのではないか。ならば。

——まさか咲夜も……。

そして銀髪の侍女はこちらを軽く一瞥すると人ごみの中をレミリア達のいる方向とは逆の方へと歩き始めた。

「……っ」

逡巡。

レミリアの右手は届かない従者の背中に手を伸ばそうとして虚空を掴むだけだ。

「どうしたのレミリア？」

「会わなきゃならない人が、いるのよ」

「じゃ行きましょうか」

紅莉はすつとレミリアの手を引くと先を促す。

「私を……疑わないの？」

そうだ。レミリアはただの一般人だった紅莉に対してまともな説

明を行っていない。それは聖杯戦争のことであり紅莉が置かれた状況の事でありレミリアの正体の事である。ただ聖杯戦争という単語をほのめかした程度にすぎないのだ。

「確かに怖いけど、もう後戻りはできないんでしょう？」

理屈など関係なく。理解など要^いらず。理性など押し殺した。

ただこの少女といなければならぬ。越奈田 紅莉がそう必死に訴える通りに行動するだけだ。

「ありがとう」

だからカリスマを欲しいままにした、その実、齢500を越えていた吸血鬼の少女レミリア・スカーレットは心からの礼を言った。

「行くわよ」

そう言つて槍兵は暗殺者の後を追いかけてゆく。

陽は既に落ちている。

残暑が続く九月終わりの夜は半袖で外出するには寒く、長袖を着て外出するには不快。何とも言い難い空気が賦氣の街を包んでいる。それは本当に秋の夜の空気が織りなしたもののなか疑問に思う人はまずいないだろう。聖杯戦争という己の願いの為に他者をことごとく切り捨てていく戦いに参加していない者に限ってだが。

「……寒い」

肌が冷えて腕をさするのは暗殺者のサーヴァントのマスター、淵谷 満月だった。

彼女は今、賦氣市の外れにある山林の中にたたずむ建設途中でその計画が倒れ、そのまま放置されているビルの外にいた。

人気のない屋内が戦いやすいと言った咲夜の要望に出来る限り合わせた場所だった。

——戦うんだ……命を懸けて。

深呼吸をして肺に新鮮な空気を送り込む。そして自身の中へと集中する。

己の中に眠る13の魔術回路を呼び起こし、少量の魔力を流して活性させる。一秒たりとも気は抜けない真剣勝負。

「そろそろ、かな」

満月は持参して来ていた鞆の中から一本の短刀を革製のカバーから抜くと、魔力を込めて地面へ突き刺した。するとこのナイフを起点にして人払いの結果が形成される。師匠から譲り受けた礼装のうちのひとつだった。盾属性の魔術以外の魔術に適正を示さない満月のために渡された一品だ。

風は無い。結界の中だからなどは関係は無い。これから起こるであろう激戦の、嵐の前の静けさ。

建設途中で放置された廃ビルを見上げた遥か先には、満月より少し欠けた曇り一つない月が浮かんでいた。

越奈田　紅莉はレミリア・スカーレットの言っていたことを思い出している。

——これからは少し危ないわ。

——危ない？

——最悪、命の危険に関わるかもしれないという意味よ。

——え？

——明日になっても私がいたのなら全てを話すわ。もし陽が昇っても私が紅莉の前に現われなかったら一時の夢だったと、全てを忘れなさい。

そう言われたのがつい30分程前。レミリアは賦氣市の外れにある山林に孤独にたたずむ建設途中で放置されたビルへと入っていた。

紅莉はただその手前で佇むのみ。言いようのない不安が寒気として紅莉の背中をそつとなぞった。

十六夜咲夜は廃ビルの中で佇んでいた。

建設途中のビル。メイド服姿の銀髪の女性は地上三階、床のフロアリングもロクに行われていないフロアでただ立っている。歪で未完成な窓から月明かりがさし込んでいる。

このフロアには物品などはない。ただ広い空間が広がっているだ

けだ。

「あなたはサーヴァントと見受けますが、その姿は果たして如何なるクラスなのでしょうか」

屋内には銀髪の侍女の影しか無かった。しかしその窓の外。背中から蝙蝠のような翼を生やした少女は確かに地上三階の窓の外、宙に浮いていた。

「やっぱりそうなのね、咲夜」

確かに蝙蝠の翼を生やした少女は自分の名を呼んだ。

——ザザ。

ノイズが奔る。視界に脳裏に耳の奥に。

「何故……私の名前を！」

それらを掻き消すように十六夜咲夜は怒鳴り散らした。

「当たり前でしょう……けど、生前の記憶はあるはずなのに無いのなら、何かしらのアクシデントによる記憶喪失ね」

——見抜かれている。

咲夜が下した判断は撤退でも停滞でもなかった。相手はこちらの事を知っていてこちらは相手の事を知らない。

しかしそれが何だと言うのだ。結果は勝利を勝ち取ればそれでいいのだ。

咲夜はスカートの内側から一振りのナイフを取り出す。その刃が月明かりを反射して不気味に煌めく。

それを弾丸のような速さで投擲する。うす暗い屋内の中に月明か

りを反している一筋の白が閃く。窓の外で翼によって浮遊している少女は軽やかに身を翻すと同時。その緩やかさからは考えられない程の速さで咲夜に肉薄したのだ。

「……!？」

驚いたのはその速さではない。この廃ビルとその外を隔てるビルの外壁を振りかぶった拳で粉碎してこちらへ一直線に向かってきたことだ。咲夜の胸元あたりまでしかないその幼い体躯のどこに圧倒的パワーが潜んでいるのか。

「この程度で驚く必要ってあるのかしら。ねえ咲夜？」

「慣れ慣れしく話しかけないでもらいたいですね」

その勢いのままに少女は咲夜へと激突をした。お互いがお互いの両手を掴みあつて全力を込めるが数秒もしない内に咲夜が押され始める。

ギリギリという擬音が聞こえそうなほどに至近で取っ組み合う二人だが、咲夜の力負けという形でこれは終わりを告げた。

そのまま押し倒される咲夜。しかしそれを行っている少女は違和感を感じた。あまりにも簡単すぎる、と。

そして少女の視界は一転する。

咲夜は押し倒されたのではなく自ら倒れてその勢いで自分を投げたと理解するのに要した時間は一秒。もはや理屈を立てるのではなくただ結果が分かっている。

「そうね……その武術も懐かしいわ」

「……」

両者の間合いが六メートルほどとなったところで、咲夜は考える。この少女は生前の自分にどのような関係があったのかと。

予想がつくはずもない。元より今目の前に居る少女は敵なのだ。彼女を倒して“災厄”を無かったことにする。記憶は無くても聖杯に懸ける願いはかろうじて覚えていた。

それを邪魔するのなら――誰だあろうと関係なかった。

「この弾幕を避けれるかしらお嬢さん？」

ナイフを取りだす。一本。二本。三本。四本。五本。六本。七本。八本。それは数の限界を知ることとはせずに際限なく溢れだしてくる。それらを早業を用いて刹那の間に投げ切るのだ。手はもはや少女の目では追いついていないだろう。これをかいくぐることはできないはずだ。

「なにこの茶番」

しかし少女は咲夜の思惑を一言で一蹴してさらに行動で凌駕することになる。

ナイフの一本一本が咲夜の投擲スキルで弾丸よりも優れず劣らずの武器になっていたはずなのだ。

それを丁寧なことに一本ずつ指と指の間で挟んで停止させていき、とりこぼしも傷を負う事すら無く全てを受け止めきって見せた。

「あなたの本気は刹那でナイフを投擲することだったかしら？
確か……」
「気がつけば一瞬で目の前に大量のナイフが私に牙を剥いていた」
「ぐらいのことが普通じゃなかったの？」

「ぐ……」

何でもこの手の内が全て少女に筒抜けなのだ。生前の咲夜を幾ら知っていたからといって咲夜の宝具の能力すら知っているような口ぶりは流石に解せない。

——ザザ。

ノイズが奔る。

——咲夜。紅茶を淹れて頂戴。

雑音に混じって誰かの声が脳裏で再生された。それは侍女の自分の仕事を全うするために至極当然のことを頼んだものだった。

——アハハ！ 咲夜ったらまたお姉様を見てドキドキしてるの？
それは無邪気な女の子の声だった。

——咲夜さん咲夜さん！神社で宴会があるそうですよ！
それはとても親しい間柄の女性だったと思う。

——三時になったら図書館まで紅茶をお願いするわ。
それは自分がたどり着きたくない境地にまで達した人の声だったと思う。

『咲夜！』

それは誰の声だったのか。あまり聴き馴染みが無くても自分が仕えるべき者の声だと理解できた。

『しっかりしなさい！私のサーヴァントでしょう！』

そして覚醒した。

「……申し訳ありません、満月様」

咲夜は頬を流れる汗を腕で拭くと目の前の少女を凝視する。
この場に満月はいない。魔術回路の繋がりを応用したテレパスだ

ろつと予測した。

「少なくとも10回は殺せたはずですが」

「無抵抗の相手を黴って楽しいのなら100回は殺しても物足りないわね」

「そうですか」

その一言を皮切りに暗殺者は闇に紛れる。

暗殺者が屋内の月明かりが届かない場所に移動するということは少女にとってはやはり茶番に変わりは無かった。

——記憶がないから本来の自分の実力を忘れているのね。こんな小細工が通じない相手だってことぐらいは思い出して欲しいものだけど。それにしても……。

少女は微笑む。廃ビルの一室で微笑んだのだ。死角からナイフが一本飛来してくるが右に半歩移動して避ける。

「さあ来なさい、私の可愛い咲夜。その都合のいい記憶喪失のままでいなさい。その方が私も楽しいわ」

——やっと飼い狗に手を噛まれるのね。

どこか心が弾んでいると背中に蝙蝠の翼が生えている少女は自覚した。

そして思い至った。本気を出してもらえないのなら本気を出してもらえるように戦おうと。

「……」

両手の五指のそれぞれの間にナイフを構えていた咲夜は目を疑った。

少女が合わせている両手の周囲に赤い雷いかづちが見えたのだ。そして小さく聞こえてくる赤い雷が炸裂するパリパリという音。

「来なさいと言ったでしょう咲夜。そうやってボーっと立っていると」

その両手を目一杯横に広げると赤い雷はそれに合わせて伸び、棒状になる。雷が形状を固定するわけがなく不安定に揺らいでいるが、しかしそれは紛れも無く槍のようだった。

相手にこちらの状況を把握されていると知った咲夜は全力を惜しまなかった。

「死ぬわよ？」

そして少女は上へと跳び上がる。天井などあつてないようなものだった。赤い雷によって象られた槍を携えた少女はそのまま天井をぶち抜いて夜空へ踊り出したのだ。

スピア・ザ・ケングニル
「紅魔神槍」

直下にある戦場となっている廃ビルに紅き魔槍を全力を以て投擲した。

音すら越えて投げ込まれたその槍は廃ビルの周囲一帯を破壊しつくす嵐を生み出した。

廃ビルの外からは直接的に戦闘は見えないが咲夜と繋がっている
魔術回路を通して感覚的に分かることは多々あった。

どういう相手かは分からないが相対している咲夜はひどく動揺していた。もしかしたら生前の咲夜に関係のある人物だったのかもしれない。

そこまで判断した時に浮かんだ感情が後悔だった。

もし召喚の失敗などせず咲夜の記憶があつたならば咲夜は今回の戦いで動揺などせずちゃんと戦えていたのだろう。しかしそれらは叶わぬ事だった。自分の未熟が今回の苦戦の原因だということは明白だった。

ガサリ、と近くの茂みが音を發した。

「何だ……狸か」

一際大きく跳ねた心臓を余所に、その音の発生源はただの狸だった。その狸は驚いたように一目散に逃げ去ってしまった。

廃ビルに動きがあった。三階の辺りから一気に全ての天井をぶち抜いて夜空へ躍り出た陰が一つあったのだ。それは自分のサーヴァントのものではなかった。月明かりに照らされたその体躯は幼く背中に蝙蝠のような羽が生えていたのだ。

さらに右手には紅い槍が握られていた。

紅い槍を携えた右手を振りかぶって。それを廃ビルに向けて投擲したと同時に本能が警鐘を鳴らした。

「イージス 専守防衛！」

いつでも発動できるように待機させていた魔術回路を瞬時に活性化させて魔術を発動させる。満月^{みつき}目の前に出現したのは蒼い有色透明、六角形のガラス板のようなものだ。

その六角形の盾は槍がビルを粉碎した後に発生した余波を防ぐが強度が耐えきれず途中で砕けてしまう。

「きゃあー!!」

突風によって体が煽られて背後にある木の幹に激突。しかし齒を食いしばってよろよろと立ち上がる。

夜空を見上げれば月を背にして蝙蝠と侍女が踊っていた。

月夜に無数の銀のナイフが交錯する。それは弾幕とも呼ぶべき密度と量を以て夜空を彩っている。

「ええ、それでいいのよ。でもあなたの本気ってこの程度じゃないでしょう?」

——言ってくれる。

齒軋り。宙に舞っている無数のナイフの内、一本を足場にして身を翻す。

ルナ・ダイアル

「時は我が手中に!」

それは咲夜の宝具だった。彼女のスカートから垂れ下がっている瀟洒な懐中時計こそが暗殺者の宝具。その能力とは“時間操作”。時間を遅延させ、時間を加速させ、時間を停止させる。この世の絶対概念の一つである時を支配する強力無比の宝具。しかしそれにも限界はある。

時間停止している間はもちろん相手はただの人形と変わり無く、全く動かないが命を取ることはできない。時間が停止しているのならばあらゆる事象は起こり得ないからだ。その例外として唯一の使い手である咲夜のみが時間停止の影響を受けずに行動をすることができる。

よって、宝具を使用した咲夜が行うのは、時間が止まっている間にあの少女の身動きが取れないようにナイフを展開し自分が有利なポジションを確保することに限る。

しかし戦いにおいてこれほどに強力な能力は他にないだろう。咲夜からすれば一連の動作であっても相手からすれば気がついた時には目の前に無数のナイフが迫り、その肝心の使い手は死角から命を狙ってきてるのだ。

だがしかし蝙蝠の翼を生やした少女はそれさえ上回った。

まるでこの先の未来を全て把握しているかのように立ち回り咲夜の予想がことごとく外れてしまい、優勢なはずの咲夜が劣勢を強いられているのだ。

少女の拳打が咲夜の鳩尾に食い込んだ。

「はっ……！」

「ほらほら、どうしたの？ さっきより動きが悪いわよ？」

言ってくれる。ただでさえ宙に舞うナイフだけを足場にして空中

で戦うという曲芸を行っているのだ。それに対して向こうは自前の翼を使って気楽に空中遊覧ときた。

スピア・ザ・グングニル
「紅魔神槍」

咲夜の背に戦慄と悪寒が奔る。この辺り一帯を更地にしたあの槍、恐らく相手の宝具でありこれによって槍兵^{ランサー}ということが確定した一撃だ。その切っ先を真っ直ぐにこちらへと向けている。

ルナ・ダイアル

「時は我が手中に」

あれが一度放たればその神速とも呼ぶべきスピードを以て敵を貫く。つまり投擲されれば負け。その前に時間を止めて移動する。取るべきポジションは背後。足場として十本のナイフを付近に撒くと宝具を解除して攻撃に――。

咲夜の視界を埋め尽くしたのは紅の一閃だった。
間一髪、槍の切っ先はこちらの胸部を掠っただけだったが背中
の悪寒はどうしても拭いきれない。

「その槍……手元に置いたまま振るうこともできるのですか」

「槍全部が投擲用なわけが無いでしょう。あなたやっぱり天然なのかしら」

クスリと微笑した少女はその表情とは正逆にこちらの命を取ろうと紅い雷によって象られた魔槍^{ほうく}を再び振るってきた。

咲夜には相殺する術もなければ防ぎきる術も無かった。元より暗殺者のサーヴァント^{サシン}が剣士^{セイバー}、弓兵^{アーチャー}、槍兵^{ランサー}を総じて三騎士クラスと呼

ぶが、特に相対戦を得意とするこれらのクラスに真っ向から挑めば劣勢を強いられるのは至極当然だった。

絶対の自負があつた宝具すらこの敵には意味をなさずこちらのペースを崩されるだけに終わる始末。勝利へ繋がる道が少しずつ薄れてきているのを咲夜は実感した。

「まさか……これで終わり？」

冷酷な声が聴覚を刺激した。落胆失望悲しみ哀しみ憤り。それら全てが複雑に混ざり合つたような一言が咲夜の心の底から絶対恐怖を揺り起こした。

少女の深紅の相貌がこちらを捉えている。相貌に自分の顔が映っている。相貌に恐怖に満ちた自分の顔が映っている。

「やっぱり記憶喪失なんていらなかつたわね。つまらない」

そのまま右手に携えていた紅い槍を横薙ぎという形で振るってきた。咲夜はナイフを足場にして上へ跳んで回避する。その時に咲夜は理解した。この槍を形成している紅い雷——これは雷などではない。視覚に捉えられるほどに、そして形状をある程度ながらに固定できるほどに高密度の魔力の塊だ。

「あなたはいつも手加減をしたままね咲夜」

咲夜の脳裏がまたざわつき始める。ざわざわと。失くしてしまつた何かを取り戻す前兆なのか二度と戻れなくなる前触れなのか。曲芸を行つて空中戦を繰り広げていた体は、重心を見失つた事で重力に従つて落下を始める。

近くで闇夜に紛れていた鳥のようなものが見えたが、意識は霞みがかかり四肢からは次第に力が抜けていくばかりでそんなものに構つ

ている場合では無かった。

——ほらこっちへ来なさい。

意識がまどろみへと堕ちていく中で手を差し伸べるような声が聞こえてくる。

まともな判別がつかないままにゆっくりとその方向へ手を差し伸べるがその声の主に届くことは無い。

「……………あ」

離れていってしまう。もう届くことはないのかと。でも昔は届いたはずだった。

——昔？ いつ？

今の咲夜には分かり切っている事だ。失ってしまった記憶の中にそれら全てがある。声の主の正体もあの蝙蝠の少女の正体も何もかもが分かるはずなのだ。その失ってしまった記憶は——声の主が持っているのだと理由も無く確信した。

だから必死に手を伸ばして届けと願う。

——返せ。それは今の私に必要なの。

目の前で、咲夜が地へ堕ちていくのを見た。

「……………はあ」

暗殺者のサーヴァントと死合っていた^{アサシン}槍兵のサーヴァント、レミア・スカーレットは胸の内にぽっかりと穴が空いてしまったような虚無を感じていた。

再会を果たしても記憶喪失ならばどうしようもないのだ。昔話に花を咲かせることも手を組んでこの戦いを勝ち抜くこともできない。ただの敵同士。

「もう一度あのころに戻れたら……」

直後に弱音を吐くなんて自分らしくないと思いなおす。弱音を吐くのはいつも決まって咲夜の前だったと懷古を呼び起こすが、もう今となっては叶うはずもない。

ふと、背後に気配を感じた。殺気などの邪悪はなくただそこにいるだけの存在が背後に居る。

「あ、紅茶を淹れました。どうぞ」

涼しい顔で十六夜咲夜はレミリアと同じ視線を浮遊し、どこから取り出したかも分からない陶器のポットを右手に持ち、左手に持っているカップに紅茶を注いでいた。そして瀟洒な笑顔でレミリアへとそのカップをさし出したのだ。

「貴方様の好みが分からなかったので私の一押しを淹れさせてもらいました。この紅茶はアッサムのミルクティーでございます。甘く芳醇な香りとこくのある濃厚な味が多くの方に好まれるのでこの紅茶を淹れさせていただきました。是非一口どうぞ」

それは従者だった。殺気など当然皆無。ただ客に対して粗相のないように完璧を尽くすメイドがいた。

そしてたった今、地に堕ちたはずの彼女は飄々としてなにも無かったかのように、淡々とこちらに紅茶を勧めてきたのだ。

「ええ、是非ともいただきたいけど、一体どうしたのかしら。さつき落ちてなかった？」

「一体何のことでしょうか？ 私は従者です。如何なる場合においても完璧を尽くし主人に最高を尽くす従者です。私がそのような失態を晒すはございません」

——あ、咲夜怒ってる。

レミリアはそう思った。咲夜の目の色が蒼から紅色へと。否。それよりさらに深い深紅へと変貌しているのだ。

「……もし貴方様が私の失態を主張するのなら、私は誠心誠意を以てそれを払拭させていただきます」

——来る！！！！

そして来た。

刹那という言葉すら適応しないほどに刹那。

時間停止した上で、目の前まで肉薄されたということは分かり切っている。そしてレミリアの眼球の一寸先に銀ナイフの切っ先が迫っているということも彼女自身は分かり切っている。

首を僅かに傾げて回避。目尻を刃が通過していき皮膚が裂けたと感覚が訴えてくる。

それらを一切合切無視してレミリアは間近にある咲夜の顔めがけて全力の拳を振るった。

「ええ、貴方様ならそう来るだろうと理解^{わか}っております。なぜなら私は従者^{メイド}ですから」

パン、と渴いた音がした。拳を、顔との間に割って入った手の平で止められたのだ。

咲夜はそのままレミリアの拳を握った手を強引に振り回すと、力の限り、レミリアを夜空へと放り投げた。そして間隙を置かずに弾丸のごとくナイフを投擲して追撃とする。

レミリアは翼をはためかせて空中で体勢を立て直し反撃を試みようとしたりとところでナイフが襲来。レミリアの肩を掠めて夜空の彼方へ消え失せる。

「……未来予知」

そしてレミリアは推測する。今日の前に居るのはつい先程までただこちらに殺意を向けてきていた暗殺者などではない。あれは十六夜咲夜だ。むしろ今が彼女の本領と呼ぶべきなのだろう。

「違うわね」

一言目で一言目を否定した。

「そうね、あなたは従者だもの。これくらいは出来て当然だわ」

「お誉めの言葉、恐悦至極にございます」

そして刹那の後、咲夜がいた場所には何も存在しない。ただあるのはレミリアの背後にナイフを構えた従者の姿だけだ。

「死角から狙うのは逆に分かりやすいわよ？」

「この私を貴方様の物差ものさしで測らないでください」

ナイフは襲ってきていない。ただ咲夜の拳が、脚がレミリアに牙を剥いた。

「流石……本場の妖怪仕込みは違う、わね！」

それは武術と呼ばれる武器を扱わない肉弾戦で使用する技術だった。

パワーやスピードを始めとするステータスではレミリアが一目瞭然に勝っているが、咲夜は武術スキルという技術を駆使してその差を埋める。

「従者とは主人に媚びる者ではなく、尽くす者です」

咲夜の靠撃はいげき——肩からの体当たりがレミリアの腹部に直撃する。その衝撃で二秒ほど呼吸が停止する。

「ならば従者である私は貴方様に尽くしましょう。貴方様が行う一挙一動を予測し常にその先を行き、快適であるように私は貴方に尽くします」

レミリアは確信する。

咲夜は本当に未来予知を行っているわけではない。これはただ単に従者として仕えるべき者に仕えるという理念を究極にまで昇華させたものだ。

従者は主人に最高を提供する。しかしそうするためには常に主人の行動を予測し先に行動しなければならない。それらを戦闘に反映したのならば。

常に相手の先を行き、相手の行動の一切を封殺する技術スキルとなる。

「それでこそ……！」

レミリアは遊びを楽しむ容姿相応の無邪気な笑みを浮かべる。そこから吸血鬼は初めて本気を出す。

咲夜のやっていることは完全な未来予知ではない。言うなれば圧倒的な経験からくる直感に疑問を持つ前に信じ、それを実行に移しているだけである。

ならばその予測を上回ればこれは無力化可能であると言う事。

スピア・ザ・グングニル
「紅魔神槍」

三度目の魔槍の召喚。手に携えて槍を構える。

潇洒な従者は優雅に夜空を舞い、吸血鬼の少女は紅く夜空を彩る。それはさながら真つ黒なキャンパスに乱暴に紅色を塗りたくって、繊細に銀色を散りばめたような抽象的な芸術を彷彿とさせる。

死線の上で描かれる芸術にしかし、気づく者はほとんど居らず当事者のみが全てを物語ることができる。

そして極限の死合いの中で生まれ続ける極限の芸術の終わりは唐突として訪れる。

レミリアが魔槍を一閃して空気を貫き、無造作かつ計画的に配置された銀ナイフを蹴散らして従者へと攻撃した。

咲夜はその宝具による必殺の突きを左腕を掠めていくのも厭わずに前へと出た。防御など捨て去り宝具などの遠回しな決着を望まず、捨て身に出た結果だった。

咲夜は手に持ったナイフを留めの一撃として突きだす。が、彼女は一秒の油断と一手の間違いが安寧を呼び込む激戦の中で確かに確認したのだ。レミリアがもう魔槍を持っていないもう片方の手にもう一本の紅魔神槍を発動したのを。

双槍。

それは本来のレミリアの型ではなかった。むしろ槍術なんて口々に修練した事すらなかった。この宝具とてただ一撃必殺の投擲武器として使用していたのだ。

しかし自分の従者だった人間の实力はやはり自分に迫るものがあった。それを確認できただけで充分過ぎた。だから“災厄”で空っぽになってしまったこの胸をもっと満たして欲しかったから、貪欲に力を求めた結果がこれだった。

「これで最後ね」

少女の声^{レミリア}が耳を刺激する。全ての事象がコマ送りになったかのよう^{マスター}にスローモーションで流れる。彼女自身は宝具を発動していないので錯覚だと理解する。もう咲夜にはこの一撃を防ぐことはおるか、回避する手段すら残っていない。

だが相討つ手段なら残っていると、そこまで考えて今の自分の立場を思い出した。

—— 申し訳ありません……満月様。

自分を信じてくれた主人にそぐえない結果になってしまった。やはり後悔しかなかった。

そして槍の切っ先が自身を貫くのは果たして何秒後かを考えてから三秒が経った。疑問が浮かび現状の把握を開始——。

レミリアの顔が咲夜の目の前にまで迫り、両者の唇が重なった。

「な、なな！？ 一体何を……！！」

「ただの愛情表現よ私の可愛い咲夜。あなたを今倒すには惜しいわ。この聖杯戦争を勝ち抜くために私に協力しなさい」

「……」

咲夜は意表を突かれて声も出ない。

「まだ完全に記憶は戻っていないようね。自分の在りようは思い出したけど他の事は思い出せていないんでしょう？　ねえ、従者のサーヴァントさん？」

「ええ……生前の私にとってあなたがどのような人物だったかは未だに思い出せませんが……」

「そう、じゃあ私と手を組みなさい。私たち二人がかりなら苦戦するサーヴァントと当たっても倒すことは出来るはずだから」

そして雲一つない月明かりの下で従者は跪き、手の甲にキスをした。

「それにしても……私がわざわざ気配を分かりやすくしていたのに、貴方はなかなか気づきませんでしたね。喫茶店の中でもこちらの気配をわざわざ分かりやすくしていたのですが」

「アサシンのクラスには“気配遮断”のスキルがあるでしょうに……咲夜。あなたやっぱり天然？」

「これで……狂戦士以外のサーヴァント全てを把握完了ね」

暗室の中で、不気味に光っている水晶に映っている吸血鬼と従者を見下しながら、銀髪を後ろで三つ編みにした女性は呟いた。

「本当に、お前の手腕には驚かされるばかりだよキャスター」

この部屋の光源となっているのは不気味に光っている水晶のみ。ボウ、と幽鬼のように一人と一体の姿が浮かんでいるように見える。

「あら、マスターから誉められたらサーヴァントとしては喜ぶしかないわ」

「それにしても、アサシン……じゃないな。メイドとランサーが手を組んだ。これはうかうかしてられない」

キャスターのマスターの声は少ししわがれた声が印象的な初老の男性のものだ

「まだ聖杯戦争は始まったばかりなのに焦る必要性なんて皆無。誰一人として脱落していないもの。手を組んだのなんて私にかかればそこら辺の蟻が群れた程度」

依然として水晶が映し出している二人のサーヴァントを虫けらを見るような目で見下すキャスターと呼ばれた女性は、水晶越しにメイド服を着ているサーヴァントがはつきりとこちらを見たことに気づいた。

「……気づかれた」

そして弾丸のような速度で一本のナイフがこちらに迫ってくる映像が水晶に流れるが、ナイフが限界までこちらに迫った後、映像は暗転し水晶は何の前触れもなく砕けてしまった。

「使い魔がやられたのか？」

「ええ、けれど気づかれるのが遅くて良かった。こちらに充分すぎるほどの情報が既に流れているもの。メイドとランサーが組んだのを見ただけでも収穫。そして二人の戦力を知れた事も大きい」

それに、とキャスターは続ける。

この接続詞に反応して暗室だったこの部屋に光が灯る。壁際に設置された蝋燭が連続して火を点けたのだ。

「使い魔を通して、メイドのマスターを確認できたわ。すぐさま逃げただけと向こうは気づいた素振りすら無かった……こちらの有利は揺るがない。残る不安要素はバーサーカーただ一組。この組みだけは依然として何の動きもない……気をつけなければならぬ」

「だな……しかし慎重になっただけでは、後手になってしまい遅れを取る」

「じゃあどうするのかしら？」

「攻めるぞキャスター」

そしてキャスターは静かに笑って、三つ編みにされた銀髪を揺らす。

「その一言を待ってたわ」

そう言っ、あらかじめ地図を広げていたテーブルを俯瞰する。

「この賦氣市全体を我が陣として作成し、聖杯戦争を終わらせる」

「おっと、それは良い事を聞いたぜ」

部屋の壁が轟音とともに爆砕した。濛々と土煙が上がる中でキャスター組は身構える。

土煙から現れたのは白黒の衣装に魔女がかぶっているような唾の広いとんがり帽子をかぶり、手に箒を持っている金髪の少女だった。一步遅れて青年男性が出てくる。

「動く撃つ……じゃなかった。撃つと動く」

そして瞬きをするような一瞬のあとには星の形をした弾幕が部屋を埋め尽くしていた。

「なあベル。これで倒せたと思うか？」

「いや、もっと派手にぶちかましていいぞ」

その言葉を聞いた魔女のような姿をした少女——魔理沙はニヤリと笑った。

「じゃあ遠慮なく……！」

「そんな事やらせると思う？　ここは私の魔術工房よ？」

弾幕の向こうでは涼しい顔で弓を構えて、矢を番えているキャスターがいた。

「おいおい、私の弾幕はどうしたんだよ」

「だからここは私の魔術工房なの……対策なんて腐るほどあるわ」

キャスターとそのマスターに触れた弾幕が全て音もなく消え去っていく。そして阿呆面をしている金髪の魔女の姿をした騎兵^{ライダー}へ矢を放った。その矢は魔力を付加されて光線となつて魔理沙に迫る。

「……！」

その光線が魔理沙へ直撃する寸前に、天井が破碎し、上から乱入してきた何者かが光線を下方へと強引に捻じ曲げた。

新たな乱入者に魔術師と騎兵^{ライダー}、そしてそのマスターたちも驚きを隠せない。

「私の噂をするから出てきてあげたわよ」

ウェーブがかかった緑色の髪。白色のブラウスに赤地に黒のラインが入ったチェック柄のベストを着て、同様の柄のスカートを穿いている女性だ。首元に黄色いリボンが結ばれている。

「狂戦士^{バースカー}、風見幽香よ。見知った顔しかないみたいだし、自己

紹介いらなかったかしら」

そう言って、狂戦士は太陽の花、向日葵ひまわりのごとく明るい笑顔を繕った。

【二章満了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3288y/>

東方聖杯戦争

2011年12月31日23時45分発行